大坪イカウ松遺跡

県営日置谷地区経営体育成基盤整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書
（第１冊）

２００７．３

財団法人 鳥取市文化財団

大坪イカウ松遺跡

県営日置谷地区経営体育成基盤整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書
（第１冊）

２００７．３

財団法人 鳥取市文化財団

序　　文

鳥取市は、鳥取県の県庁所在地として、また、平成16年の合併によって山陰地方最大の都市としてさらに発展してきた、人口20万人余りを擁する地方都市です。

鳥取市内には、各河川による平野部、その周辺の丘陵上、砂丘地等に数多くの遺跡が存在しています。これらの埋蔵文化財は地域の先人たちの生活を語る歴史資料であり、後世に継承していくべき市民の貴重な財産です。このような認識のもと、財団法人　鳥取市文化財団では、開発と文化財の共存をはかるべく、各関係機関の協力を得ながら埋蔵文化財発掘調査事業を進めています。

さて、今回実施した大坪イカウ松遺跡の調査は、県営日置谷地区経営体育成基盤整備事業に伴う発掘調査として、平成18年11月から調査を行ってきました。調査の結果、弥生時代から奈良時代の貴重な遺構、遺物が検出され、当地域の古代文化の一端を明らかにする資料を提供することができました。ささやかな冊子で不十分な所も多くありますが、私たちの郷土理解に役立てていただくとともに、今後の調査研究の一助となれば幸いです。

おわりに、今回の発掘調査にあたり、ご理解とご協力をいただきました地元の皆様をはじめ関係各位の方々に、心から感謝申し上げます。

平成19年３月

財団法人　鳥取市文化財団
理事長　山　﨑　祥　次

例　　言

1．本書は、県営日置谷地区経営体育成基盤整備事業に伴って行った大坪イカウ松遺跡の発掘調査報告書(第１冊)である。
2．本発掘調査は、鳥取県の委託を受けて、財団法人　鳥取市文化財団　鳥取市埋蔵文化財センターが平成18(2006)年度に現地調査を実施し、あわせて報告書を作成した。
3．発掘調査を実施した大坪イカウ松遺跡の所在地は、鳥取市青谷町大坪字イカウ松、字三反田である。
4．発掘調査によって作成された記録類および出土遺物は鳥取市教育委員会に保管されている。
5．現地実測・図面の作成は、現地実測の一部を財団法人鳥取市文化財団から委託を受けたフジテクノ有限会社派遣技師が行ったほかは調査員・補助員を中心に調査参加者全員の協力のもとに行った。また、出土遺物の整理および遺物実測・図面の浄書は濵橋博子を中心として下多みゆき・神谷伊鈴がこれを補佐した。
6．本書の執筆・編集は、山田真宏が行い、神谷伊鈴がこれを補佐した。
7．発掘調査から本書の作成にあたっては、次の方々から指導・助言ならびに協力をいただいた。記して厚く感謝いたします。

鳥取県東部総合事務所農林局地域整備課　鳥取県埋蔵文化財センター
鳥取市教育委員会文化財課　城東建設株式会社　株式会社東都文化財保存研究所

(順不同、敬称略)

凡　　例

1．本書に用いた方位は、第１・２図は座標北、その他は磁北を示し、レベルは海抜標高である。
2．本書に使用した遺構等の略号および表示は次のとおりである。

SD：溝状遺構
●：土器
×：木
■：杭
▒：遺物密集地

本 文 目 次

序文・例言
第１章　はじめに……1
　Ⅰ．発掘調査に至る経緯と経過……1
　Ⅱ．調査の組織・体制……2
第２章　遺跡の位置と環境……3
第３章　調査の結果……6
　Ⅰ．調査地の堆積状況と調査の概要……6
　Ⅱ．検出遺構と遺物……6
　　1）Ⅰ区の調査 ……6
　　2）Ⅱ区の調査 ……15
　　3）Ⅲ区の調査 ……16
　Ⅲ．まとめにかえて……31
写真図版(PL１～27)
報告書抄録

挿 図 目 次

第１図　調査地位置図……1
第２図　調査地周辺遺跡分布図……5
第３図　Ⅰ区調査地実測図……7、8
第４図　Ⅰ区SD-01実測図 ……9
第５図　Ⅰ区出土遺物実測図……9
第６図　Ⅰ区木組遺構(1)実測図……10
第７図　Ⅱ区調査地実測図(1)……11、12
第８図　Ⅱ区木組遺構(2)実測図……11、12
第９図　Ⅱ区調査地実測図(2)……13、14
第10図　Ⅱ区出土遺物実測図……16
第11図　Ⅲ区調査地実測図(1)……17、18
第12図　Ⅲ区調査地実測図(2)……19、20
第13図　Ⅲ区遺物出土状況図……21
第14図　Ⅲ区出土遺物実測図(1)……22
第15図　Ⅲ区出土遺物実測図(2)……23
第16図　Ⅲ区出土遺物実測図(3)……24
第17図　Ⅲ区出土遺物実測図(4)……25
第18図　Ⅲ区出土遺物実測図(5)……26
第19図　Ⅲ区出土遺物実測図(6)……27
第20図　Ⅲ区出土遺物実測図(7)……28
第21図　調査地内出土祭祀具模式図……30

写真図版目次

PL 1　1．調査地遠景(東南東から)
　2．調査地近景(北西から)
　3．調査前Ⅰ区全景(西から)
　4．調査前Ⅱ・Ⅲ区全景(北から)
PL 2　1．Ⅰ区東半掘下後(東から)
　2．Ⅰ区掘下後全景(西から)
PL 3　1．Ⅰ区西半北壁断面(南西から)
　2．Ⅰ区東半北壁断面(南東から)
　3．Ⅰ区東壁断面(西から)
PL 4　1．Ⅰ区SD-01検出状況(北東から)
　2．Ⅰ区SD-01断面(南東から)
　3．Ⅰ区SD-01掘下時全景(西から)
　4．Ⅰ区木組遺構検出状況(1)(南東から)
PL 5　1．Ⅰ区木組遺構断面および検出状況(2)
　2．Ⅰ区遺物検出状況(南から)
PL 6　1．Ⅱ区北半掘下後全景(北から)
　2．Ⅱ区北半掘下後全景(南から)
PL 7　1．Ⅱ区南半掘下後全景(北から)
　2．Ⅱ区南半掘下後全景(南から)
PL 8　1．Ⅱ区北半西壁断面(北東から)
　2．Ⅱ区南半西壁断面(南東から)
　3．Ⅱ区南半折れ曲り部西壁断面(南東から)
PL 9　1．Ⅱ区南半西壁断面(南東から)
　2．Ⅱ区南半西壁断面(南東から)
　3．Ⅱ区南壁断面(北から)
PL10　1．Ⅱ区南半杭列および遺物検出状況(1)(南南東から)
　2．Ⅱ区南半杭列および遺物検出状況(2)(南南東から)
PL11　1．Ⅱ区南半杭列部分(1)(北北東から)
　2．Ⅱ区南半杭列部分(2)(西から)
　3．Ⅱ区南半杭列部分(3)(西から)
PL12　1．Ⅱ区南半木組遺構検出状況(1)(南東から)
　2．Ⅱ区南半木組遺構検出状況(2)(南東から)
　3．Ⅱ区南半木組遺構検出状況(3)(東から)
　4．Ⅱ区南半木組遺構部断面(東から)
PL13　1．Ⅱ区遺物検出状況(1)
PL14　1．Ⅱ区遺物検出状況(2)
PL15　1．Ⅱ区遺物検出状況(3)
PL16　1．Ⅲ区掘下後全景(北から)
　2．Ⅲ区掘下後全景(南から)
PL17　1．Ⅲ区西壁断面(南東から)
　2．Ⅲ区西壁断面(部分)(南東から)
　3．Ⅲ区北壁断面(南から)
PL18　1．Ⅲ区東壁断面および杭列検出状況(1)(南西から)
　2．Ⅲ区杭列検出状況(2)(南南東から)
　3．Ⅲ区杭列検出状況(3)(北北東から)
PL19　1．Ⅲ区遺物検出状況(1)
PL20　1．Ⅲ区遺物検出状況(2)
PL21　1．Ⅰ区出土遺物
　2．Ⅱ区出土遺物(1)
PL22　1．Ⅱ区出土遺物(2)
PL23　1．Ⅲ区出土遺物(1)
PL24　1．Ⅲ区出土遺物(2)
PL25　1．Ⅲ区出土遺物(3)
PL26　1．Ⅲ区出土遺物(4)
PL27　1．Ⅲ区出土遺物(5)

第１章　はじめに

鳥取市は鳥取県東部に位置する山陰の中核都市で、県庁所在地として政治・経済・文化の中心的な役割を担ってきた。平成16(2004)年11月には周辺８町村(国府町、福部村、河原町、用瀬町、佐治村、気高町、鹿野町、青谷町)との市町村合併が成立し、面積765.66km²、人口20万人余りを擁する山陰地方最大の都市へと拡大することとなった。このことは、それまで市内に2,300ケ所余りとしてきた遺跡の数にも反映され、現在その数は倍増の約4,770ケ所となりさらに増加の一途をたどっている。

このような新生鳥取市の中で、大坪イカウ松遺跡の所在する鳥取市青谷町大坪地区は、旧青谷町を大きく三分する２河川(勝部川と日置川)のうち東側の日置川下流域に位置する。日置川による細長い河谷平野である流域は日置谷と呼ばれ、大坪地区は川を挟んで蔵内地区に相対するこの日置谷の中央部西山麓に位置し、北は奥崎地区、南は早牛地区に隣接する世帯数60余りの地区である。

Ⅰ．発掘調査に至る経緯と経過

今回報告する大坪イカウ松遺跡は、大坪集落の北北東に隣接し、日置谷西側丘陵裾の標高約６～７ｍの水田地帯に位置する。遺跡周辺では、後述のとおり西側丘陵上の弥生時代後期から古墳時代の大口遺跡群や丘陵裾の弥生時代後期から奈良時代のカヤマ遺跡等が1980年代に調査された以外は、遺跡の様相はあまり知られておらず、近年の踏査や試掘調査によって遺構・遺物の散布状況が知られるようになったところである。

その後、合併前の青谷町産業振興課から県営の日置谷地区経営体育成のための大規模な基盤整備事業

第１図　調査地位置図

計画の協議がもたらされた。そこで鳥取県教育委員会事務局文化課、鳥取県埋蔵文化財センターと青谷町教育委員会で協議が行なわれ、遺跡の有無、その範囲・性格を知るための試掘調査が平成16年度から平成18年度にかけて青谷町教育委員会、合併後は鳥取市教育委員会によって実施されている。その結果、平野部の中央に推定される微高地上に弥生時代から中・近世の遺跡がその粗密の違いや検出深度の違いはあるものの点在することが判明してきている。

今回の発掘調査は、この県営日置谷地区経営体育成基盤整備事業計画に伴って、鳥取市教育委員会と関係機関との間で計画変更等も含めた種々の協議を行った結果、現状での遺跡の保護・保存が難しい深く掘り下げる水路部分について記録保存の調査を行うこととなったものである。調査の実施に当たっては、対象地の屈曲点や現況の水路部分等によって、調査地をⅠ～Ⅳ区に工区分けし、このうちⅠ～Ⅲ区の調査を鳥取市文化財団　鳥取市埋蔵文化財センターが、Ⅳ区の調査を鳥取市教育委員会が実施することとなった。

本報告のⅠ～Ⅲ区の調査は、平成18年11月中旬に資材搬入とⅠ、Ⅱ区の表土等の重機による除去から着手し、北側のⅠ区から実施した。調査に当たってはⅠ区とⅡ区の折れ曲り点に任意の基準点C0を置き、それから東側のⅠ区に沿って基本的に10mピッチで測量杭(C0～E40)を打って基準ラインを設定した。南側のⅡ区、Ⅲ区は、このⅠ区基準ラインから90°南に振って同様に基準ラインを設定し(C0～S35)、さらに調査区が折れ曲がるⅡ区途中からはそれまでのラインの２m西に並行ラインを設定して(W2S35～W2S150)基準ラインとした。掘り下げは、耕作土および試掘調査で判明していた旧ほ場整備造成土等を重機によって除去し、以下、水路施設の影響範囲の深度まで人力によって行った。Ⅰ区はその中央よりやや西寄りで調査地を東西に二分する機能中の暗渠排水用土管が検出されたことから、当初これを残して東半・西半として調査を行ったが、その後その下に遺構が遺存することが判明したため、鳥取市教育委員会および関係者と協議の上、Ⅰ区の調査終了時に土管を除去して下部の調査を実施した。またⅡ区はそのほぼ中央で調査地が折れ曲り、かつ掘り下げ深度も異なることから深度差部分を境に北半・南半として調査を行った。Ⅲ区はⅠ・Ⅱ区の調査中に表土等の重機による除去を行い、Ⅰ・Ⅱ区に続けて調査を行った。なお、試掘調査結果から湧水と壁面崩壊を考慮し、調査地内に排水溝を設置して常時排水を可能とするとともに段掘りと緩傾斜の堀下げを行った。こうして、調査に伴う写真撮影や実測等の記録類の作成を適宜行いながら、１月下旬に現地調査を終了した。調査面積は511.0㎡である。なお整理作業の一部は現地作業と並行して進めたが、現地調査終了後に本格的に整理作業および報告書作成を行った。

Ⅱ．調査の組織・体制

発掘調査の組織・体制は以下のとおりである。

平成18年度　調査主体　財団法人　鳥取市文化財団
　　理事長　山崎祥次
　　調査指導　鳥取市教育委員会事務局　文化財課
　　事務局　財団法人　鳥取市文化財団　鳥取市埋蔵文化財センター
　　所長　前田　均
　　副所長　山田真宏
　　主幹　谷口恭子
　　調査担当　財団法人　鳥取市文化財団　鳥取市埋蔵文化財センター
　　調査員　山田真宏
　　調査補助員　福田朋幸(～平成18年12月)
　　濵橋博子

第２章　遺跡の位置と環境

鳥取市青谷町地域は、鳥取県の中央よりやや東に位置し、東部地域の西端、旧国名で言えば因幡国に属し、伯耆国との国境にある。先述のとおり、平成16年11月１日に東部９市町村(鳥取市、国府町、福部村、用瀬町、佐治村、河原町、気高町、鹿野町、青谷町)が合併し、新鳥取市となった。鳥取県内でもその前後に市町村合併が進み、隣接町も泊村から湯梨浜町に変更となり、平成18年度現在で39市町村が18市町村になっている。

さて、鳥取市内における青谷町地域は、その南域は標高500mを超す山地で、そこから北へ伸びる溶岩台地が東西を取り囲み旧町域の境界をなしている。溶岩台地の北端は長尾鼻、オゴノ鼻と続き、30mを超える断崖となって日本海に突出している。また、溶岩台地の東を日置川、西を勝部川が流下し、河口近くで合流して日本海に注いでいる。合流地点付近に沖積平野、海岸部に砂丘が形成されている。青谷町内の砂浜は、全国的にも珍しい鳴り砂の浜として知られている。

青谷町地域の遺跡は、確認されているものだけでも約480ケ所あり、その大半は古墳である。また新鳥取市となり遺跡の数は約4,770ケ所あり、旧青谷町の10倍に増加している。

今回調査した大坪イカウ松遺跡(１)は先述のとおり、青谷町の東側を流れる日置川下流域にある奥崎集落と大坪集落の間にある山裾の水田地帯に位置する。日置谷地区は昭和24年から大規模なほ場整備が行われているが、当時は現在のように重機等は使用されなかったので旧地形をそれほど大きく改変することができなかった。このため現在でも平野部の中央部分が高まり東西に向かって下がっていくという旧地形を見ることができる。このことから平野部の中央には自然堤防状の高まりの存在を想定することができ、現在の集落側と日置川側に２本の旧河川が存在すると考えられる。また近年実施された試掘調査の結果からも同様のことが想定される。この自然堤防状の高まりと考えられる部分からは奈良時代から中世にかけての遺物や柱穴などが確認されているほか、弥生時代中期後葉の土器や溝状遺構が確認されている。平成16年の調査では大坪岸ノ上遺跡として調査が実施されたが、その後の調査で遺跡を分けるように旧河川が流れていることが想定できることから大坪イカウ松遺跡と大坪大縄手遺跡(７)、大坪岸ノ上遺跡(８)にそれぞれ分かれるものと考えられるようになった。このほか周辺の遺跡としては西側丘陵上に昭和59年に発掘調査が実施され、弥生時代後期から古墳時代にかけての土壙墓や貯蔵穴、竪穴住居跡が確認された大口第１遺跡(９)、弥生時代後期から古墳時代前期前半にかけての墳丘墓、竪穴住居跡が確認された大口第２遺跡(10)が存在する。また丘陵裾部には昭和56年に県営ほ場整備事業に伴い発掘調査が実施され、弥生時代後期から奈良時代にかけての竪穴住居跡や古墳が確認されたカヤマ遺跡(12)などがある。カヤマ遺跡周辺は「カヤマ千軒」という伝承が残っており、古くから人が住むことのできる環境であったと考えられる。またこの遺跡では土馬が出土しており、今回調査の大坪イカウ松遺跡地点からも馬形や人形、斎串を含む律令期の祭祀具が出土していることから、両遺跡の何らかの関係も想定される。

なお、その他の青谷町域の遺跡は次のとおりである。

旧石器時代の遺跡は、今のところ確認されていないが、青谷町は砂丘地に立地しているため、今後発見される可能性もある。縄文時代の遺跡としては、砂丘地にある県立青谷高等学校新築時のボーリングにより偶然発見された青谷第１遺跡(２)がある。ここでは詳細は不明ながら地表面下6.3mから縄文時代中期から弥生時代、古墳時代にかけての土器片が出土している。またこのほかの遺跡としては縄文時代前期の土器片の散布が確認された蔵内上長谷第２遺跡(４)、1995年に試掘調査が実施され、縄文時代後期の土器片が出土した蔵内上長谷第４遺跡(５)、絹見部落周辺の石皿や石斧が出土した長和瀬稲葉尾遺跡(18)が挙げられ、さらに今回の調査でも縄文時代晩期の土器片が出土している。

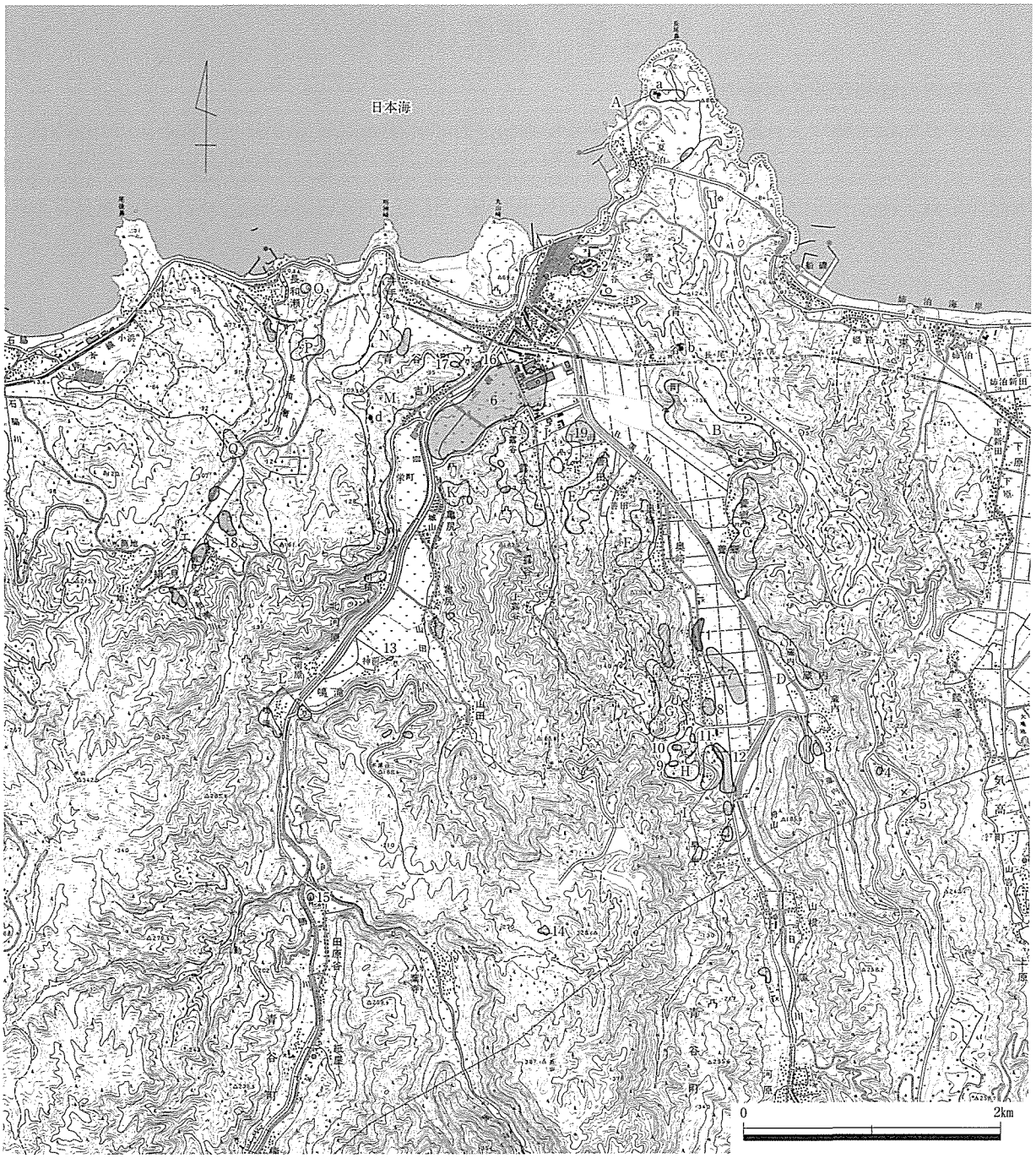
弥生時代を代表する遺跡として青谷上寺地遺跡(６)がある。青谷上寺地遺跡は青谷町の西側を流れる

勝部川と東側を流れる日置川の合流点付近に位置する。平成９年から15年にかけて町による試掘調査が実施され、平成10年から12年にかけて(財)鳥取県教育文化財団による発掘調査が、13年から18年には鳥取県埋蔵文化財センターによって遺跡の範囲確認調査及び内容確認調査が実施されている。その結果、縄文時代晩期から奈良時代にかけての遺物や遺構が確認されており、現在では青谷上寺地遺跡の大まかな範囲が確定してきている。その中でも遺跡の中心となる弥生時代後期の大規模な護岸施設や祭祀場跡、水田跡などのほか、当時の生業がわかる鍬・鋤類などの木製農耕具や石庖丁、漁労具なども多く出土している。これらの多種多量の遺物は、コンテナ2,400箱以上の土器、精巧な作りの木製容器類や大量の建築材、全国最多となる227点の卜骨、約270点の鉄製品など量・質共に日本を代表する遺跡といえよう。また、朝鮮半島系の無文土器など外来系の土器、貨泉や鏡、石材などの交流を示す遺物も数多く出土しており、当時の青谷がいかに繁栄していたのかが良く分かる。弥生時代後期の溝の中からは約5,300点にのぼる多量の人骨が出土し、中には殺傷痕のある人骨も確認されている。また出土した頭蓋骨３点の中には弥生人の脳が遺存しており、今後の研究によっては弥生人のルーツを知ることができるかもしれない。膨大な量の遺物が出土していることから現在も整理作業が続けられ、平成18年には弥生時代の楼観と考えられる7.24mの柱が新たに確認されている。このほかの弥生時代の遺跡としては、青谷上寺地遺跡周辺の丘陵上でほぼ完形の弥生時代中期の壺が出土した青谷第４遺跡、蔵内水船遺跡(３)、田原谷宮下遺跡(15)などがある。

古墳時代になると青谷町の中央及び東西の丘陵上に多数の古墳が造営されている。現在確認されている古墳や散布地は海岸から約６㎞以内の位置に分布し、ほとんどの古墳は直径10mから20m程度の円墳である。町内の主な古墳としては東側の台地・丘陵には北側から町内最大の前方後円墳である長尾鼻１号墳(ａ)(全長34m)を有する長尾鼻古墳群(Ａ)、町内第２の前方後円墳である青谷２号墳(東山古墳ｂ/全長28m)、船や星などの線刻が施され県の史跡に指定されている阿古山22号墳(ｃ)を有する阿古山古墳群(Ｂ)、養郷古墳群(Ｃ)、蔵内古墳群(Ｄ)と続く。中央部の丘陵には東側尾根北側から善田古墳群(Ｅ)があり、市の史跡に指定されている奥崎古墳群(Ｆ)、大坪古墳群(Ｇ)、大口古墳群(Ｈ)、早牛古墳群(Ｉ)と連なっている。中央西側の丘陵には露谷古墳群(Ｊ)、その西側に亀尻古墳群(Ｋ)、その奥には金環が出土した鳴滝古墳群(Ｌ)が連なっている。西側の丘陵上には100基以上の古墳からなり、船の線刻が施された吉川43号墳(ｄ)を有する吉川古墳群(Ｍ)が存在し、その西側の丘陵には井手古墳群(Ｎ)、長和瀬古墳群(Ｏ)、長谷古墳群(Ｐ)、釜ノ口古墳群(Ｑ)と続いている。この時期の古墳以外の遺跡としては前述の青谷第１遺跡、青谷上寺地遺跡、大口第１・第２・第３遺跡、カヤマ遺跡などが知られるのみで、あまり数多くの遺跡は確認されていない。

奈良時代以降の遺跡もあまり多くは知られていないが、代表的なものとしては善田傍示ヶ崎遺跡(19)、山田淡谷東平遺跡(14)、前述の青谷上寺地遺跡、カヤマ遺跡などがある。善田傍示ヶ崎遺跡は露谷川を供給源とし、馬形や人形、斎串など律令期の祭祀具が大量に出土しており、周辺に役所に関連する遺跡が存在する可能性がある。さらに青谷上寺地遺跡でも数点ではあるが、馬形や斎串、転用硯が出土しており、青谷町内の複数の箇所で律令祭祀が行われていたことが想定される。また平成９年に発掘調査が実施された山田淡谷東平遺跡は、大坪集落から西側に丘陵を一つ隔てた南側に面した中腹に立地し、中世の礎石建物跡、鍛冶に関連する鉄滓、釘などが確認されている。

歴史上の資料としては、因幡国の官道に置かれた４カ所の駅のうち「柏尾駅」の有力な候補地といわれる相屋神社(ウ)がある。しかし湯梨浜町で確認されている笏賀駅からの距離が近いことなどから明確な位置やルートははっきりと判ってはいない。ただし、相屋神社周辺には「下馬ノ子」、「上馬ノ子」などの馬に関する地名が残っている。また部民制度に由来するといわれる日置・勝部などの郷名が今も残っており、町内の式内社である利川神社(ア)と幡井神社(エ)がそれぞれ早牛・絹見に、式外社である相屋神社と神前神社(イ)がそれぞれ青谷・鳴滝にあることは、何らかの遺跡との関わりがあると考えられる。



1．**大坪イカウ松遺跡**
2．青谷第１遺跡
3．蔵内水船遺跡
4．蔵内上長谷第２遺跡
5．蔵内上長谷第４遺跡
6．青谷上寺地遺跡
7．大坪大縄手遺跡
8．大坪岸ノ上遺跡
9．大口第１遺跡
10．大口第２遺跡
11．大口第３遺跡
12．カヤマ遺跡
13．鳴滝宮ノ前遺跡
14．山田淡谷東平遺跡
15．田原谷宮下遺跡
16．岩本遺跡
17．青谷第４遺跡
18．長和瀬稲葉尾遺跡
19．善田傍示ヶ崎遺跡

A．長尾鼻古墳群
B．阿古山古墳群
C．養郷古墳群
D．蔵内古墳群
E．善田古墳群
F．奥崎古墳群
G．大坪古墳群
H．大口古墳群
I．早牛古墳群
J．露谷古墳群
K．亀尻古墳群
L．鳴滝古墳群
M．吉川古墳群
N．井手古墳群
O．長和瀬古墳群
P．長谷古墳群
Q．釜ノ口古墳群

a．長尾鼻１号墳
b．青谷２号墳
c．阿古山22号墳
d．吉川43号墳

ア．利川神社
イ．神前神社
ウ．相屋神社
エ．幡井神社

—凡例—

× 遺物散布地

主要古墳

第２図　調査地周辺遺跡分布図

第３章　調査の結果

Ⅰ．調査地の堆積状況と調査の概要

大坪イカウ松遺跡は、日置川による河谷平野に推定される複数の旧河道に沿って形成された微高地上の一角に形成されているものと考えられる。今回の調査対象地は、日置谷地区の基盤整備地内西端部の水路予定地で南から北に延びる丘陵の東側裾に位置する。また、全長210m余りの細長い対象地は北からⅠ～Ⅳ区に分けられ、今回調査を行ったⅠ～Ⅲ区はそのうちの北側にあたる。当該地の標高は6.6～7.3mほどで、昭和24年からのほ場整備以降水田および畑地として利用されている。

調査地の土層は基本的には原地形に沿うものと見られ、丘陵裾から谷平野部にかけて位置するⅠ区と丘陵裾にほぼ並行するⅡ区・Ⅲ区とは、その上位の30～60cm程度の旧ほ場整備造成土を除くとやや異なる。Ⅰ区の層序は、造成土下の東側に10～40cmの灰色系のシルト・砂層、中央部でその下に20～40cmの褐灰色・灰色系のシルト・砂層、中央部から西側でその下に５～10cmの褐灰色系の粘土・細砂層、10～40cmの黒褐色粘土層、さらに中央部から東側でその下に東端部では河原石を密に含む灰黄褐色・灰色系の(粗)砂層と続く。また、西端部の黒褐色粘土層の下位は地山礫を含む。基本的には、西側造成土下の褐灰色系の粘土・細砂層・黒褐色粘土層(上位)が遺物包含層で、遺構は中央よりやや西側の造成土直下から溝状遺構(SD-01)、その下位の黒褐色粘土層中から木組遺構(１)を検出した。なお中央部から東側下位の河原石を密に含む灰黄褐色・灰色系の(粗)砂層は日置谷の旧流路の堆積層と考えられるが、遺物は摩滅した土器の微細片が僅かに認められたのみである。Ⅱ区では、北半はⅠ区西側と同様の堆積で、南半は、造成土下に10～20cmの褐灰色系の粘土、その下に20cm程度の黒褐色粘土、10～20cmの黄灰色砂層、黒褐色粘土層と続く。造成土下の褐灰色系の粘土・黄灰色粘土・黒褐色粘土層(上位)が遺物包含層で、遺構は中央部の褐灰色粘土(第75)層直下から旧流路あるいは溝状遺構に伴うと考えられる杭列(１)、南端部の黄灰色砂(第112)層直下から木組遺構(２)を検出した。Ⅲ区では、北端部は基本的にⅡ区南半の層序が続き、北端から20m程度南から南端まで確認される遺物を含まない灰色系の砂・地山礫を密に含む粘砂質土・オリーブ黒色粘土層が南下するにしたがって次第に厚みを増し、逆にこれらの層と造成土の間の黒褐色粘土層が次第に薄くなって一時途絶え、南端部で再び認められる形で続く。Ⅱ区と同様に造成土下の褐灰色系の粘土・黒褐色粘土層が遺物包含層で、遺構は中央部から北にかけての褐灰色粘土(第116・160)層直下から旧流路あるいは溝状遺構に伴うと考えられる杭列(２)を検出した。

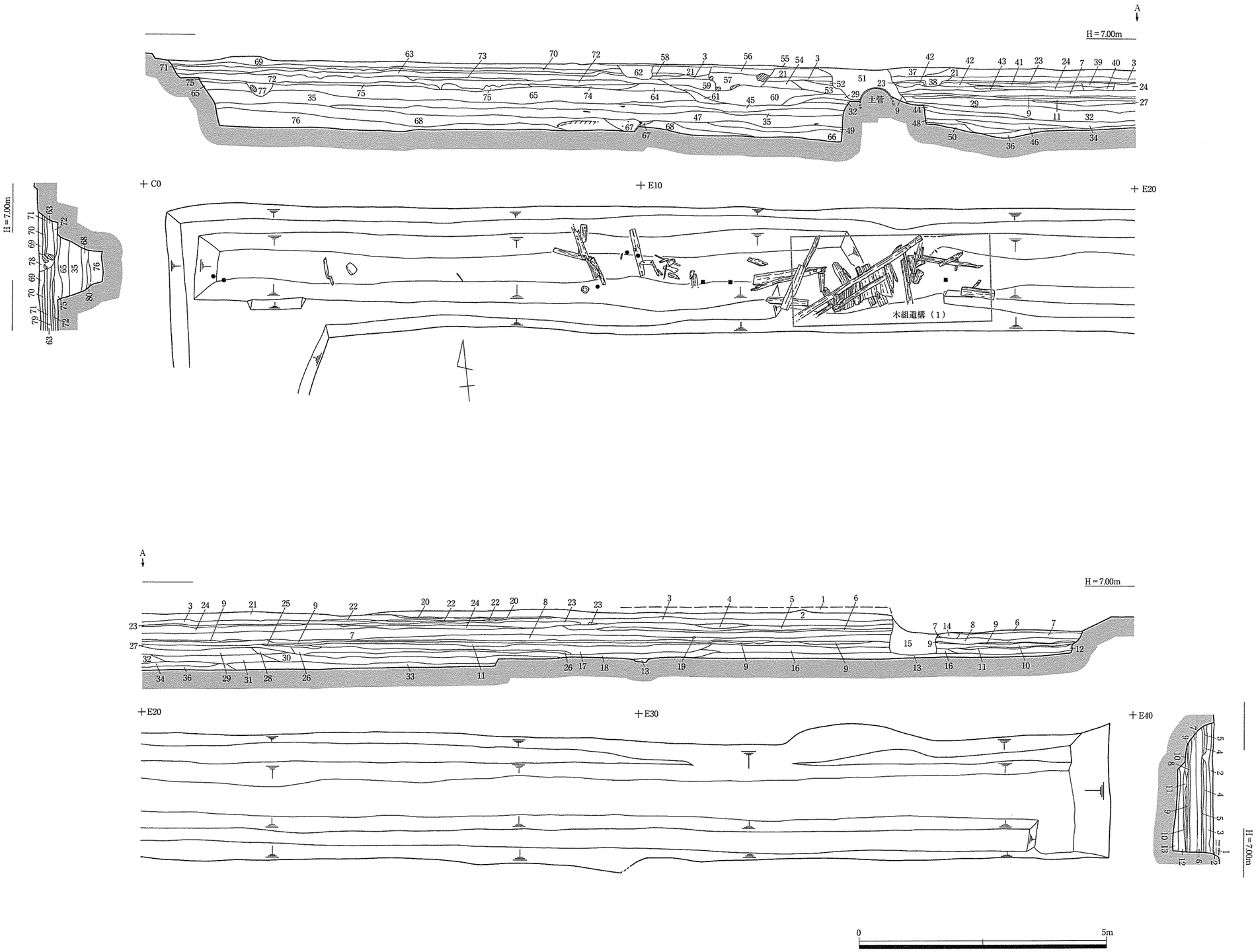
なお遺物は、遺存状態その他で実測できたものは少ないが、包含層遺物として縄文土器と見られる細片、弥生時代後期～古墳時代中期の壷・甕、古墳時代後期～奈良時代の壷・杯蓋・杯身・杯が出土した。また穂摘具・鍬・鋤・田下駄・田舟・木錘等の農具、曲物・槽といった容器、横櫛・下駄といった装身具、発火具の火きり板、建築材の梯子、土木材の杭、部材といった多量の木製品が出土し、さらに石錘や銅の溶解物も出土している。

Ⅱ．検出遺構と遺物

１）Ⅰ区の調査

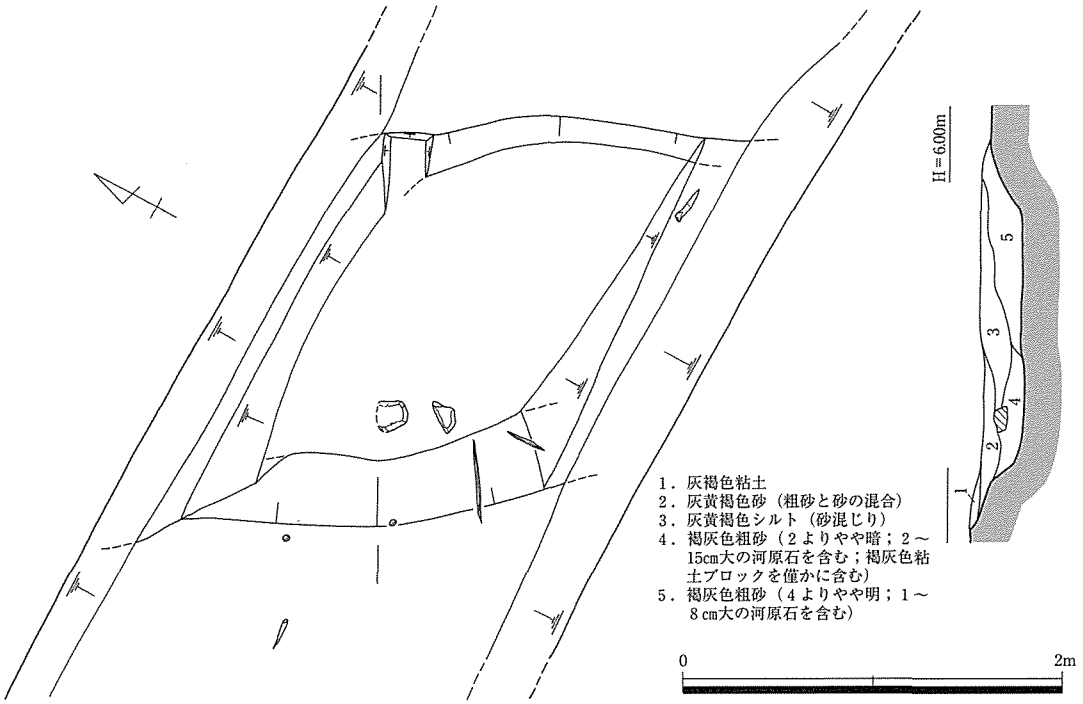
SD-01(第４図、PL４)

調査区の中央よりやや西側に位置し、検出面の標高は約6.0mである。東西に細長い調査区を南南東から北北西に横断する形で検出した。現状での主軸はN-32°-W程度にとり、検出長3.45m、幅2.05m、深さ0.4mを測る。断面は浅いⅢ状で、西側で部分的に傾斜が二段状に変化する。底面標高は5.6m程度で、埋土は灰黄褐色系のシルト・砂層と褐灰色(粗)砂層である。遺物は、両側肩部付近から径３～４cm、遺存長24～44cmの自然木の片側を削った杭が刺さった状態で検出されたほか、底部付近の砂層中から口縁端部に刻み目をもつ突帯が貼付された縄文土器片を含むいずれも摩滅した二次堆積遺物と見ら



1．褐色粘質土（耕作土）
2．黄灰色粘質土（灰褐色土ブロックを含む）
3．黄褐色粘質土（黄灰色粘質土ブロックを含む）
4．黄褐色粘質土（3よりやや明）
5．黄褐色粘質土（3・4より明）
6．にぶい黄褐色粘質土
7．灰褐色シルト（無機物ブロック点在）
8．灰褐色シルト（7より暗；無機物ブロック点在）
9．にぶい黄褐色シルト
10．褐色シルト
11．褐色シルト（無機質分沈着）
12．灰褐色シルト（8よりやや暗）
13．灰黄褐色粗砂（1～10cm大の河原石を密に含む）
14．灰褐色シルト（黄褐色土ブロックを密に含む）
15．黄灰色粘質土と黄褐色粘質土と灰褐色シルトと暗オリーブ灰色粘土と暗オリーブ灰色砂と灰黄褐色粗砂の混合
16．灰黄褐色砂（13よりやや明るく、粒度小；灰褐色シルトブロックを含む）
17．灰褐色砂（8よりやや暗）
18．灰黄褐色砂（13よりやや明るく、粒度小；16よりやや暗）
19．褐灰色粘土
20．黄褐色粘質土（3よりやや明）
21．灰褐色粘質土
22．黄褐色粘質土
23．黄褐色粘質土（5よりやや明）
24．にぶい黄褐色粘質土
25．灰褐色砂と褐灰色粘質土の混合
26．灰褐色シルト
27．灰褐色シルト（26よりやや明）
28．青灰色シルト
29．褐灰色シルト
30．灰黄褐色砂（18よりやや明）
31．灰色シルト
32．灰色粘土（31よりやや明）
33．灰色砂（31よりやや暗）
34．灰色シルト
35．黒褐色粘土（45よりやや明；オリーブ褐色土ブロックを含む）
36．灰色粗砂（下位に河原石含む）
37．灰褐色粘質土（42よりやや暗；黒褐色土ブロックを含む）
38．灰黄褐色粘質土
39．灰褐色粘質土（黄褐色土ブロックを含む；7よりやや明）
40．褐色粘質土
41．にぶい黄褐色粘質土（24よりやや明）
42．褐灰色シルト（灰白色粗砂を含む）
43．褐灰色シルト（42よりやや暗）
44．灰色粘土（34よりやや暗）
45．黒褐色粘土（35よりやや暗）
46．黒褐色粘土
47．黒褐色粘土（35・46よりやや暗）
48．黒褐色粘土（47よりやや暗；灰白色砂を含む）
49．灰色砂（黒褐色粘土ブロックを含む）
50．黒褐色粘土と灰色砂の混合
51．にぶい黄褐色粘質土（褐灰色粘土ブロックを含む）
52．灰褐色シルト（黄褐色無機質分沈着）
53．灰褐色シルト（52よりやや暗）
54．灰黄褐色シルト
55．褐色粘質土
56．褐色粘質土～暗褐色粘質土（55より暗）
57．褐灰色粘質土
58．黄褐色粘質土（3より明）
59．灰黄褐色粗砂（褐灰色シルトブロックを含む）
60．褐灰色砂（粗砂と砂の混合）
61．暗灰色粘土（灰白色砂混じり）
62．灰黄褐色粘質土
63．褐灰色粘土
64．黒褐色粘土
65．黒褐色粘土（35・64よりやや暗；灰黄色粘土ブロックを含む）
66．黒褐色砂混じり粘土
67．黄灰色粗砂
68．黒褐色粘土（66・47よりやや暗；灰黄色粘土ブロック点在）
69．灰黄褐色粘質土（21よりやや灰黄色かかる）
70．灰黄褐色粘質土（69より暗）
71．灰黄褐色粘質土（黄褐色粘質土を多く含む）
72．褐灰色砂
73．灰黄褐色砂
74．褐灰色細砂（褐灰色粘質土混じり）
75．褐灰色粘土（74よりやや暗；褐灰色細砂混じり）
76．黒褐色粘土（68よりやや明；0.5～1cm大の地山礫を含む）
77．黒褐色粘土（65よりやや明；褐灰色砂及び黄褐色粘質土ブロックを含む）
78．褐灰色粘土と暗褐色粘質土の混合（15～25cm大の礫を含む）
79．褐灰色粘土（75よりやや黄灰色かかる）
80．灰黄褐色粘土（76より明；0.5～1cm大の地山礫を含む）

第3図　Ⅰ区調査地実測図



第4図　Ⅰ区SD-01実測図

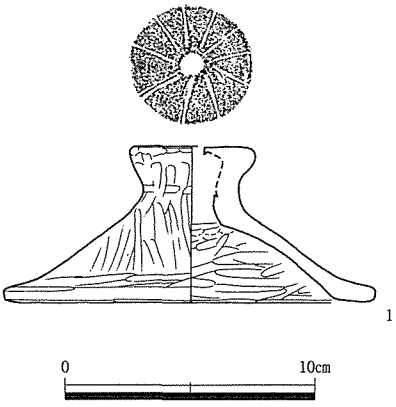
れる土師器・須恵器といった土器細片が僅かに検出された。時期は、旧ほ場整備以前という事以外不明である。

木組遺構（1）（第6図、PL4・5・21）

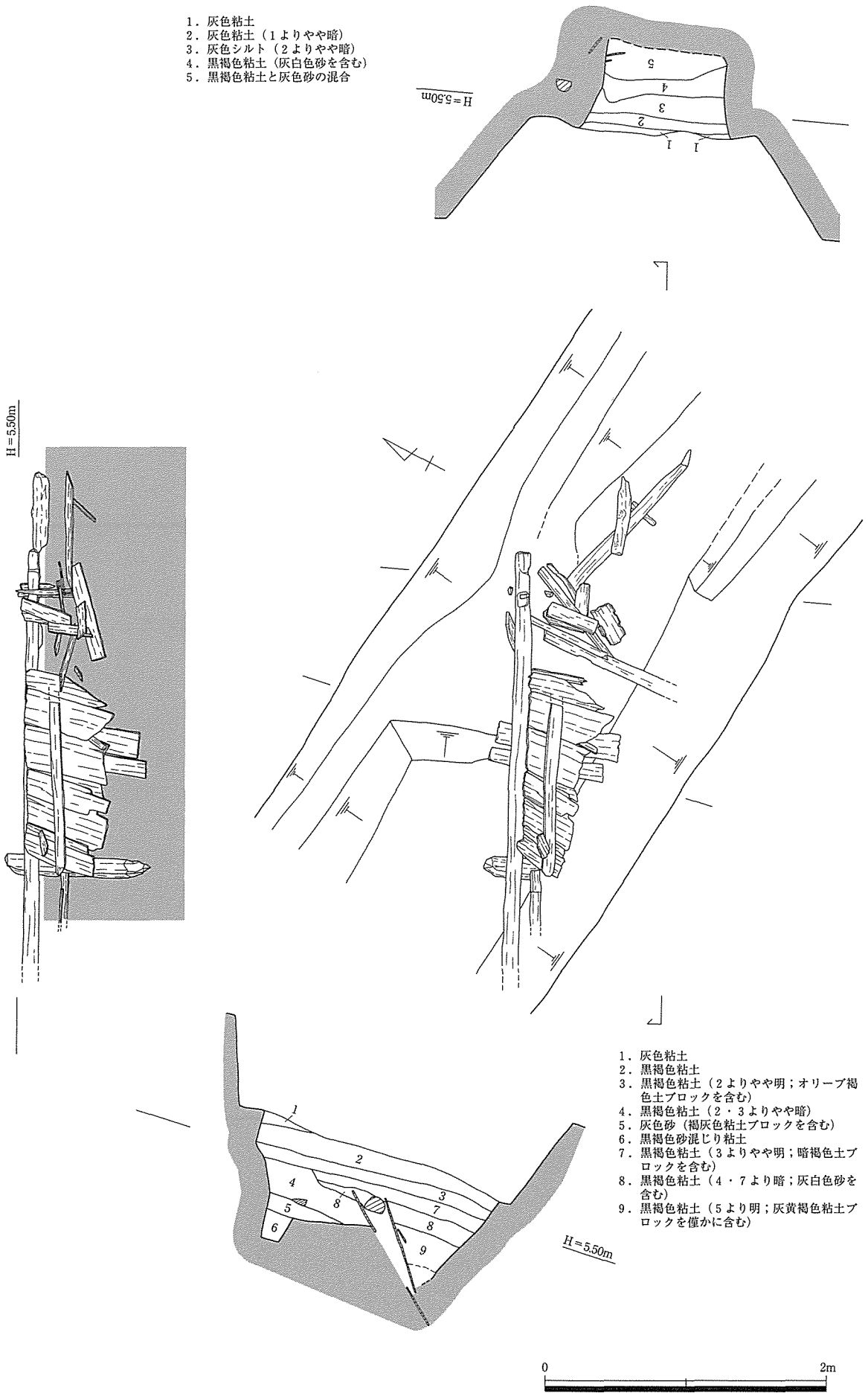
調査区の中央よりやや西側に位置し、検出面の標高は約5.5mである。調査区を南西から北東に横断する形で検出した。現状での主軸はN-64°-Eにとり、南西側は調査区外に続く。検出長は3m以上で、深さは0.6m程度である。径14cmの断面かまぼこ形の柱状の材を南西～北東方向に横にして置き、その北東端部にほぞ孔を抜いて杭留めし、さらにその北西側に杭を打って支えとしている。また南東側には遺存長75～120cm、幅15～40cm、厚さ1.5～2cm程度の板材をその側辺を僅かに重ねてこの横材に接し沿わせる形で矢板状に打ち込み、さらにこれらの矢板材を幅8cm、長さ126cm以上、厚さ1.5cm程度の細長い板材で押えている。遺構の性格については、部分的な検出ではあるが、断面観察から本遺構の南東側に想定される溝状遺構あるいは旧流路の護岸施設の可能性を考えておきたい。遺物は埋土中から長方形の足板の両長辺にそれぞれ対となる2ケ所の切り欠けを入れた田下駄や板材が検出された。時期についてはそれを示す遺物はないが、その下位の遺物包含層から弥生時代から古墳時代の壷・甕類のものと見られる体部片が出土していることから古墳時代以降のものと考えられる。

出土遺物（第5図、PL5・21）

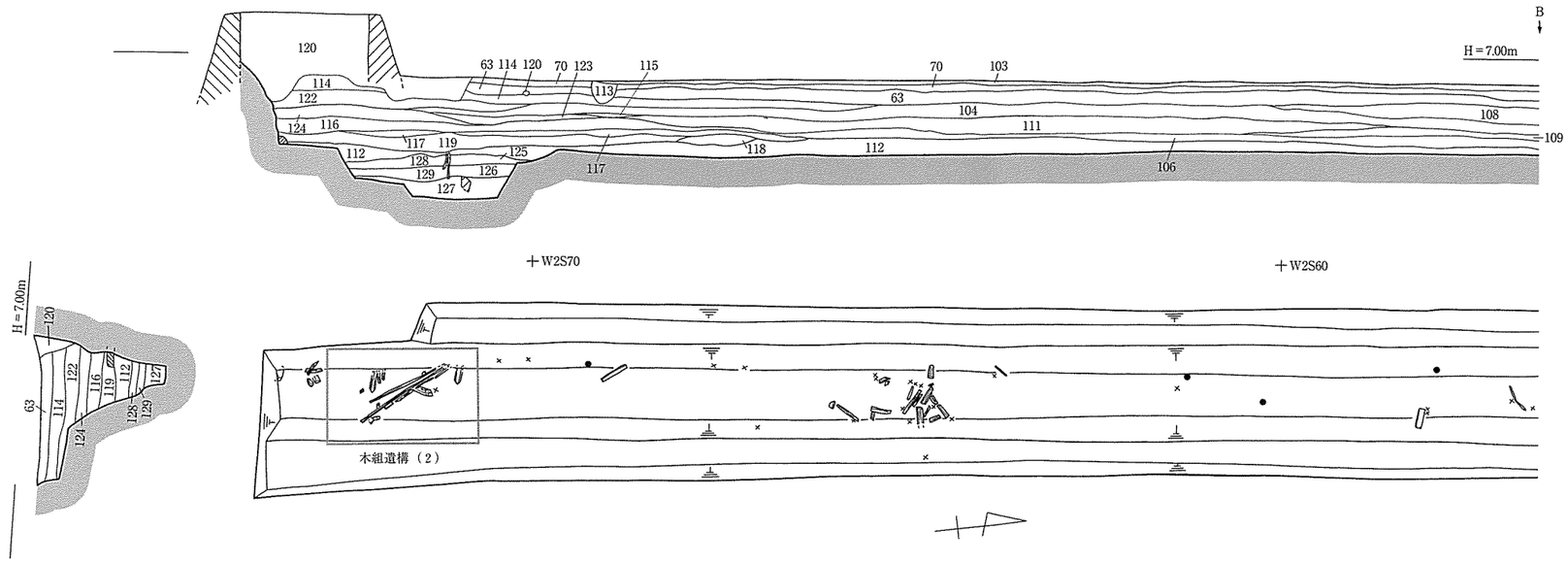
Ⅰ区では出土土器類のほとんどは細片で、黒褐色粘質土（第68）層出土の蓋を図化した。つまみ部径5.0cm、口径14.6cm、器高6.15cmを測り、内外面ともヘラミガキで仕上げられる。つまみの中心には、円孔がなされ、そこからヘラ状工具による線刻が放射状に施される。またそのほかの遺物として、土木材の角杭2点・板状杭11点、その他の板状材9点などが出土している。

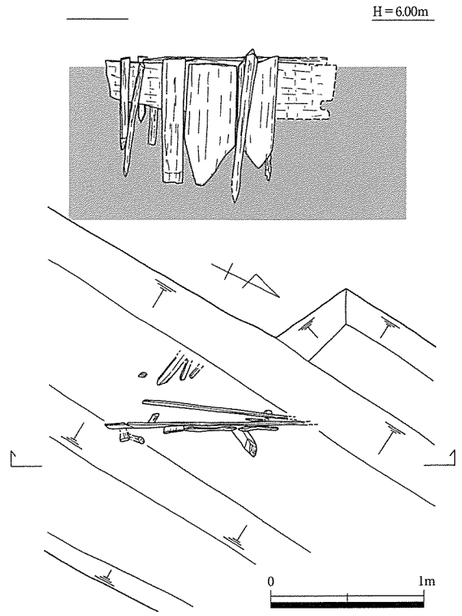


第5図　Ⅰ区出土遺物実測図

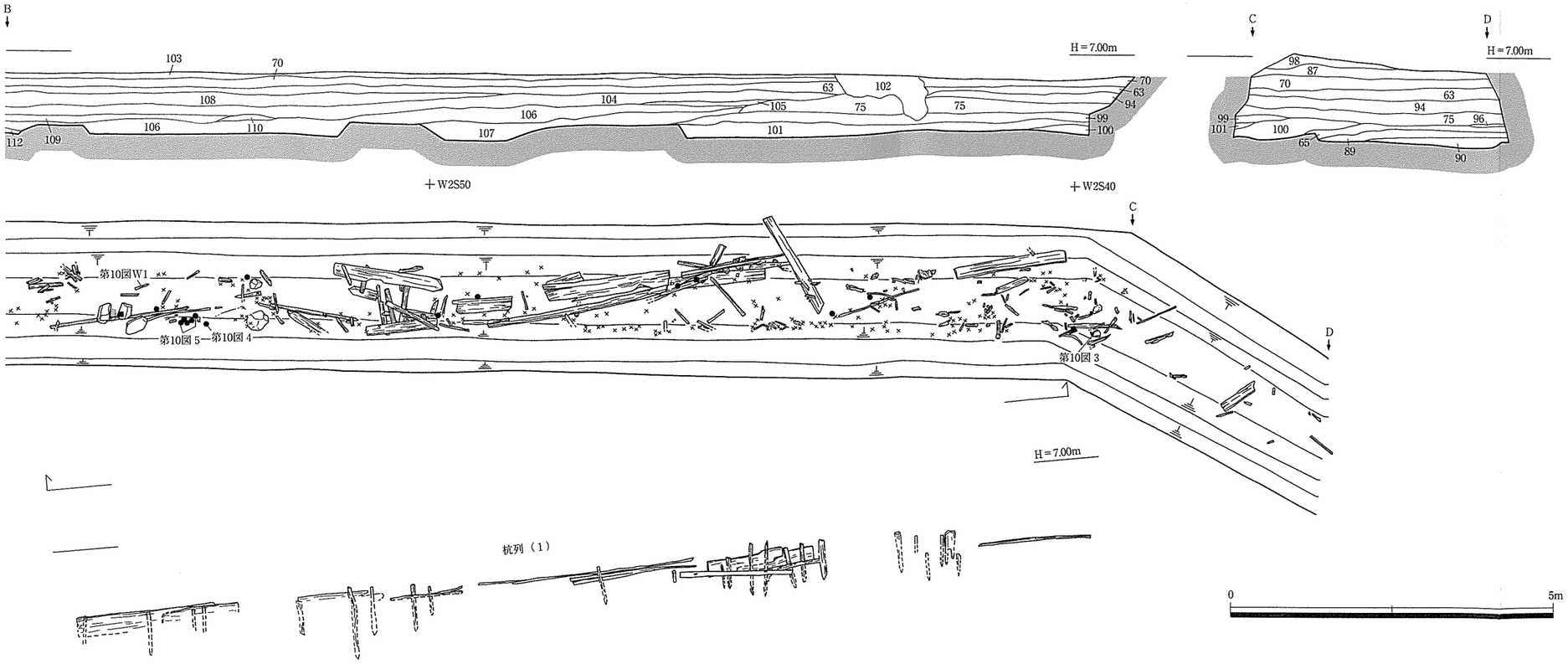


第6図　Ⅰ区木組遺構(1)実測図

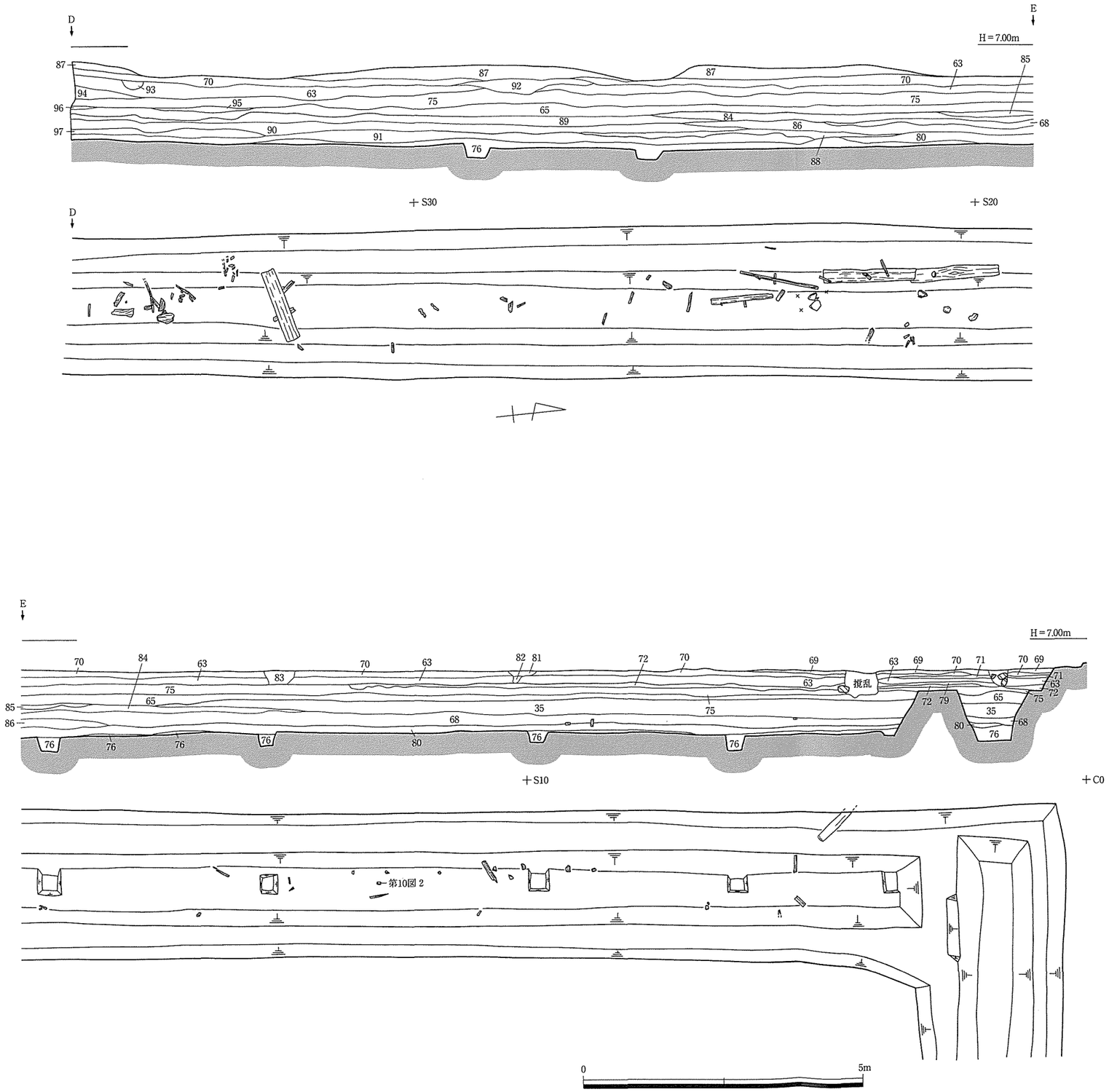




第８図　Ⅱ区木組遺構（２）実測図



第７図　Ⅱ区調査地実測図（１）



35. 黒褐色粘土（45よりやや明；オリーブ褐色土ブロックを含む）
63. 褐灰色粘土
65. 黒褐色粘土（35・64よりやや暗；灰黄色粘土ブロックを含む）
68. 黒褐色粘土（47・66よりやや暗；灰黄色粘土ブロック点在）
69. 灰黄褐色粘質土（21よりやや灰黄色かかる）
70. 灰黄褐色粘質土（69より暗）
71. 灰黄褐色粘質土（黄褐色粘質土を多く含む）
72. 褐灰色砂
75. 褐灰色粘土（74よりやや暗；褐灰色細砂混じり）
76. 黒褐色粘土（68よりやや明；0.5～１㎝大の地山礫を含む）
79. 褐灰色粘土（75よりやや黄灰色かかる）
80. 灰黄褐色粘土（76より明；0.5～１㎝大の地山礫を含む）
81. 灰黄褐色粘質土（70よりやや明）
82. 褐灰色粘質土（63よりやや明；炭化物及び石を含む）
83. にぶい黄褐色粘質土（７～20㎝大の石を含む）
84. 黒褐色粘土（35・65よりやや明るく、68よりやや暗）
85. 灰黄褐色粘質土（にぶい黄橙色砂を含む）
86. 黒褐色粘土（68よりやや明；0.5～２㎝大の地山礫含む）
87. にぶい黄褐色粘質土（耕作土）
88. 黒褐色粘土（86よりやや暗く；76よりやや明；0.3～１㎝大の地山礫を含む）
89. 褐灰色粘土（灰黄色粘土ブロックを含む）
90. 黄灰色粘土（0.3～0.5㎝大の地山小礫を含む）
91. 黒褐色粘土（76よりやや暗；0.5～３㎝大の地山礫を含む）
92. 灰褐色粘質土（５～25㎝大の石を含む；炭を含む）
93. 黒褐色粘質土（10㎝大の石を含む）
94. 褐灰色粘土（75よりやや明）
95. 灰黄褐色粘土（黄褐色粘土ブロック；粗砂及び炭を多く含む）
96. （95と同）
97. 褐灰色粘土（0.2～0.3㎝大の地山小礫及び炭を僅かに含む）
98. 暗褐色粘質土（褐灰色土ブロックを含む）
99. 褐灰色粘土（75よりやや明；0.2㎝大の砂粒混じり）
100. 褐灰色砂と灰黄褐色粘土の混合（黄褐色土ブロックを多く含む）
101. 黒褐色粘土（0.5㎝大の地山小礫・灰白色砂・炭を含む）
102. にぶい黄褐色粘質土
103. 灰黄褐色粘質土（70よりやや明）
104. 褐灰色粘土（63・75よりやや暗）
105. 褐灰色粘土（75・104よりやや暗）
106. 黒褐色粘土（0.2㎝大の砂粒を含む；褐灰色粘土を含む）
107. 黒褐色粘土（106よりやや暗）
108. 黒褐色粘土（やや褐色かかる）
109. 黒褐色粘土（灰黄色粘土ブロック及び0.5㎝大の地山小礫を含む）
110. 灰黄褐色粘土と褐灰色砂の混合（黄褐色土ブロックを多く含む）
111. 黒褐色粘土（109よりやや褐色度強）
112. 黄灰色砂（黄灰色粘土・灰黄色土及び0.2㎝大の地山小礫を含む）
113. 褐灰色粘土（63よりやや暗；黄褐色土ブロック及び灰黄色土ブロックを含む）
114. 黒褐色粘土
115. 褐灰色粘土（104よりやや暗）
116. 褐灰色粘土（115よりやや暗）
117. 褐灰色粘土（116よりやや暗；灰黄色土ブロックを多く含む）
118. 黄灰色砂混じり粘土（炭を含む）
119. 黒褐色粘土（124よりやや明）
120. 上部５～８㎝アスファルト、その下真砂土と砕石の混合
121. 灰黄褐色粘土
122. 黒褐色粘土（114よりやや暗）
123. 黒褐色粘土
124. 黒褐色粘土（119・122・123よりやや暗）
125. 黒褐色粘土（124よりやや明るく灰色かかる；やや砂質かかる）
126. 黒褐色粘土（125より暗く、やや暗褐色かかる）
127. 黒褐色粘土（125・126より暗；褐灰色細砂及び植物遺体を含む）
128. 黒褐色粘土（125より褐色かかる；砂質ではなく、粘質度強；124よりやや明）
129. 黒褐色粘土（126・128よりやや暗）

第９図　Ⅱ区調査地実測図（２）

2）Ⅱ区の調査

杭列（1）（第7・10図、PL10・11）

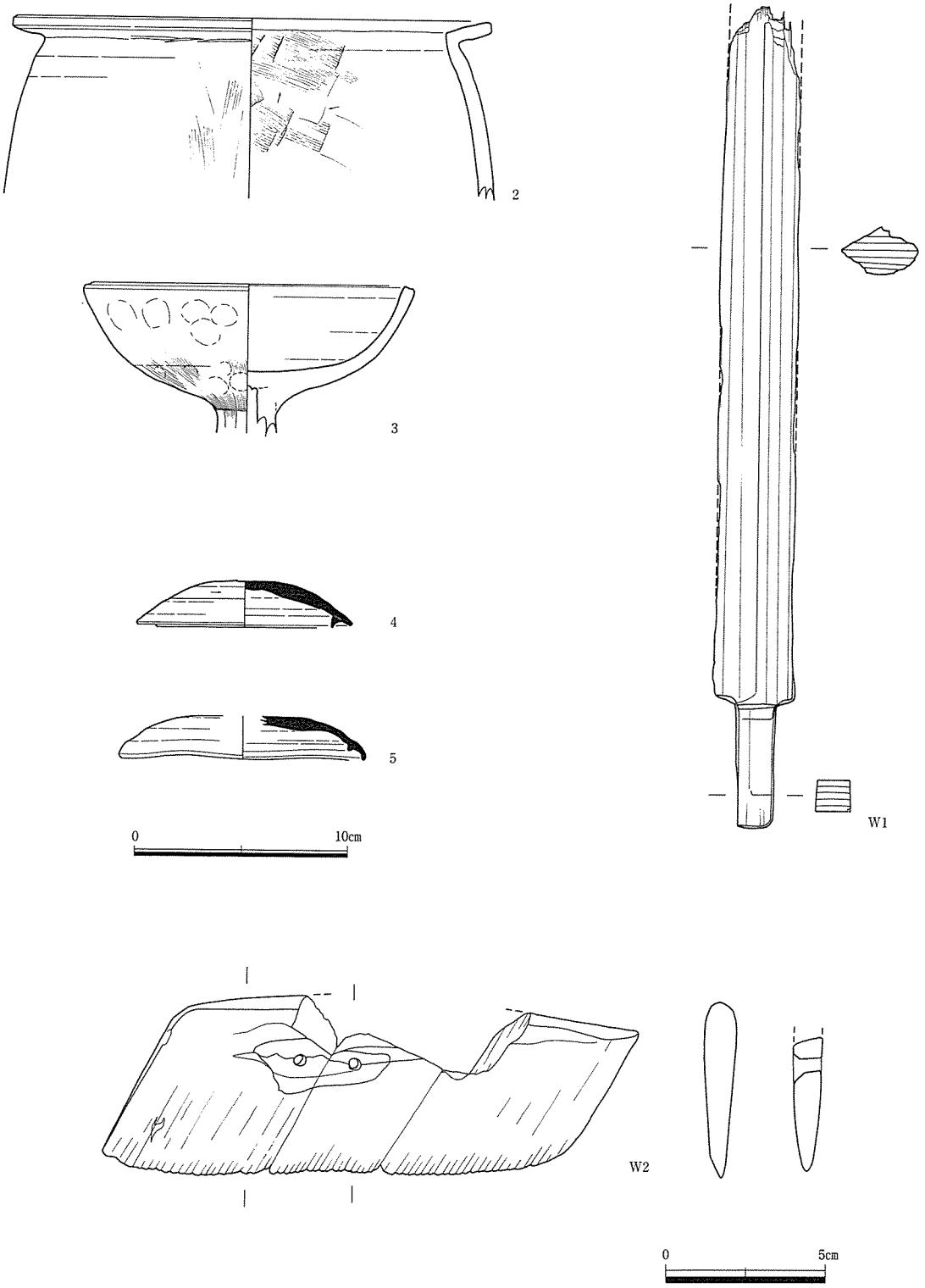
調査区の中央よりやや南側に位置し、各杭の遺存検出標高は5.9～6.2m程度である。南北に細長い調査区を南南東から北北西に緩いS字状を描いて横断する形で検出した。現状での主軸はN－2°－W程度にとり、検出長は14m程度である。調査範囲内で確認できた杭の数は24本であるが、基本的には遺存長36～111cm程度の角杭が使用されており、僅かに部材の転用と見られる角杭が認められる。部分的には長さ約92～285cm、幅13～29cm程度の板材を横長に並べてこれらの杭で固定した状況が認められる。また周辺の平面観察では、この杭列の東側に幅約3.3m程度に渡って褐灰色砂層と遺物の集中が認められ、断面観察では、杭列は認められないものの浅い溝状に切り上がる層序の変化（第100層）が認められる。このことから本杭列の性格としては、溝状遺構あるいは旧流路の護岸施設の可能性を考えておきたい。遺物としては、杭列周辺から少量の土師器（高杯（3）他）・須恵器（杯蓋（4、5）他）片と多くの木製品（人形・馬形・剣形（W1）・斎串等の祭祀具、建築材の梯子、板材、自然木等）が検出されている。時期については、周辺の出土遺物から古墳時代後期以降（木製祭祀具からすると奈良時代か）を考えておきたい。

木組遺構（2）（第7・8図、PL12）

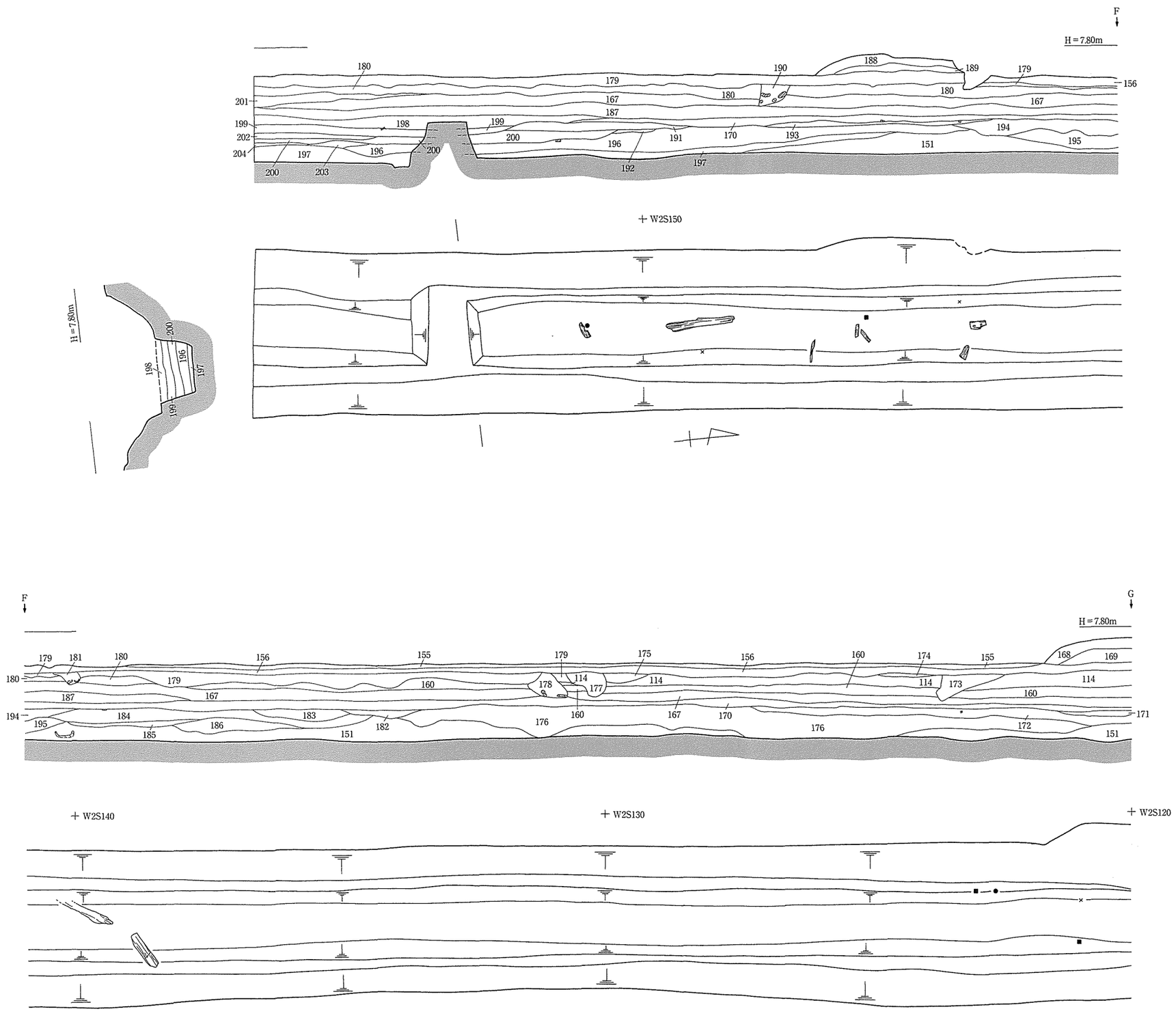
調査区の南端付近に位置し、検出面の標高は約5.7mである。調査区を南東から北西に横断する形で検出した。現状での主軸はN－27°－Wにとり、両端ともに調査区外に続く。検出長は1.4m以上で、深さは0.4m程度である。長さ約120～150cm、幅20～40cm程度の板材を横長に置き、それに接するように、南西側は遺存長46～80cmの角杭・丸杭を打ち込む。また北東側は、遺存長73～81cm、幅13～31cm、厚さ2cm程度の板材をその側辺を接するようにしながらこの横長板材に接し沿わせる形で縦長の矢板状に打ち込み、さらにこれらの矢板材あるいは横長板材に直接接する形で、遺存長60～113cm、径・幅4～10cmの角杭・丸杭を打ち込んで各板材を固定している。遺構の性格については、検出範囲が狭小で土層の観察でも明瞭な違いが認められないことから明確な判断は困難である。また時期については土器類の出土もなく不明である。

出土遺物（第10図、PL21・22）

Ⅱ区では、土器類は少なく木器が多く検出されたが、そのうち遺存状況の比較的良好な土器と、木器のうち農具・祭祀具を図化した。北半下位粘土層出土の甕・穂摘具のうち甕（2）は、強く屈曲するくの字状口縁をもつ。穂摘具（W2）は、刃縁に対して斜めに木目が走る平行四辺形状に仕上げられ、背に近い側に2孔一対の紐孔を穿ち、さらに片面のみこれらを溝で繋いでいる。使用頻度は刃部の摩滅状況から高いと見られる。南半杭列周辺の砂層あるいは砂粒混じりの粘土層で検出された遺物密集地出土遺物のうち、高杯（3）は口縁部がやや立ち上がり気味の椀状のものである。杯蓋（4、5）はいづれも口縁部内側にかえりをもつもので、（4）のかえりは口端部よりわずかに下方に突出し、（5）は突出しない。祭祀具の剣形木製品（W1）は剣先は欠くものの、断面菱形の剣身と関部を削り込んで柱状に造り出した茎が遺存する。遺存長25.55cm、剣身部幅2.4cm・厚さ1.5cm、茎部幅1.1cm・厚さ1.0cmを測る。なおⅡ区出土の木製品としては上述2点のほかに、農具の穂摘具1点・田下駄1点、容器の曲物蓋1点、祭祀具の人形8点・馬形4点・斎串21点、建築材の梯子1点、土木材の角杭21点・板状杭6点・丸杭3点、その他の板状材19点などが出土している。



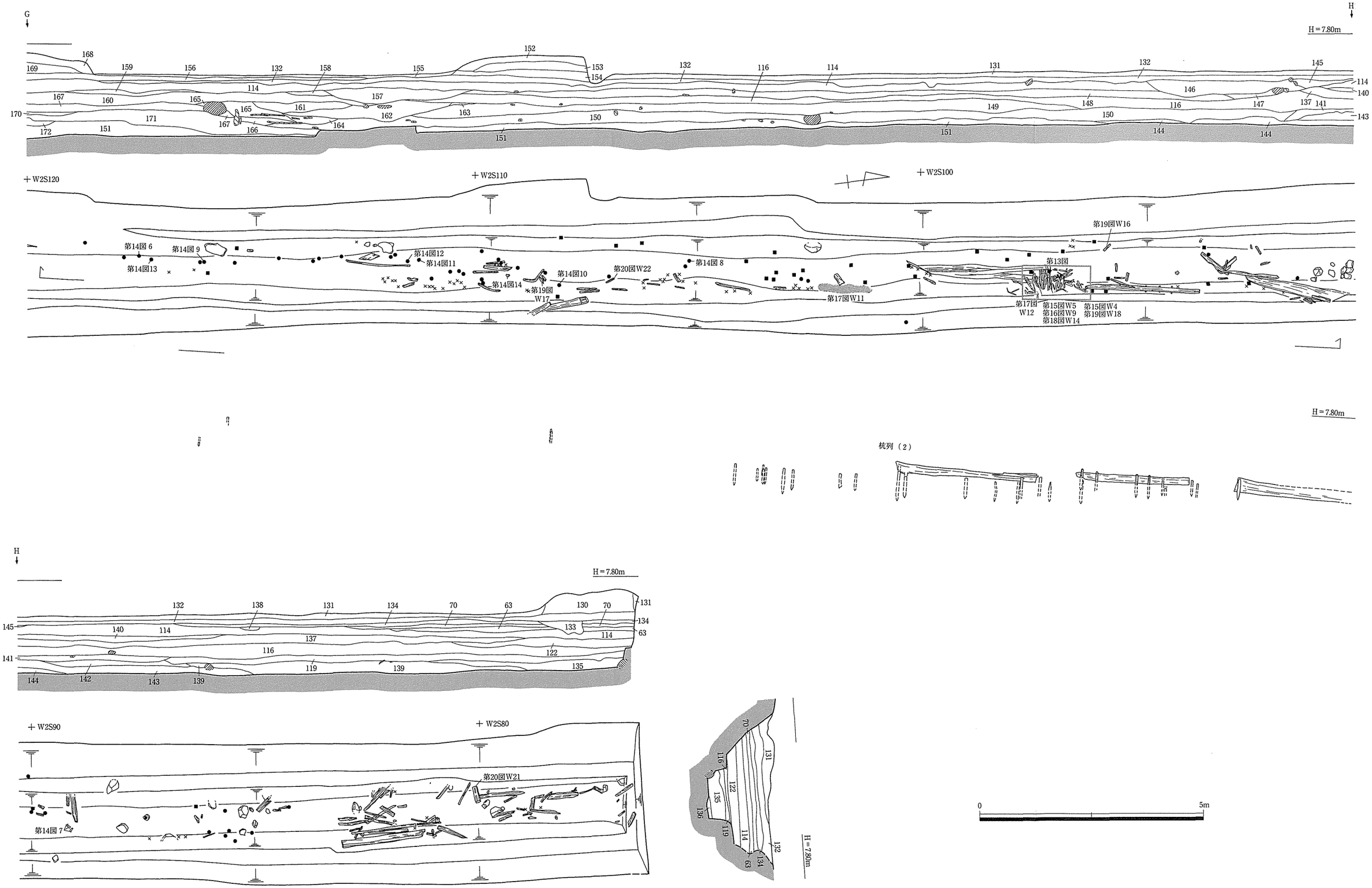
第10図　Ⅱ区出土遺物実測図



70. 灰黄褐色粘質土（69より暗）
114. 黒褐色粘土
116. 褐灰色粘土（115よりやや暗）
119. 黒褐色粘土（124よりやや明）
122. 黒褐色粘土（114よるやや暗）
130. 灰褐色粘質土（真砂土、暗褐色土ブロック及び３～20cm大の礫を含む）
131. 暗褐色粘質土（しまっていない）
132. 灰黄褐色粘質土
133. 灰黄褐色粘質土（132より明；黄褐色無機質分を多く含む；２cm大の小礫を含む）
134. 褐灰色粘質土（黄褐色無機質分、炭化物を含む）
135. 黒褐色粘土（119よりやや明るく、褐灰色かかる；0.5cm大の地山小礫を含む；炭化物及び植物遺体を含む）
136. 灰色砂（黒褐色粘土ブロックを含む）
137. 黒褐色粘土（114よりやや明るく、やや灰黄褐色かかる）
138. 灰黄褐色粘質土（黄褐色無機質分を含む）
139. 黒褐色粘土と灰色砂の混合
140. 灰褐色粘土
141. 灰色砂（１～５cm大の地山小礫及び黒褐色粘土ブロックを含む）
142. 褐灰色粘土（0.2～0.5cm大の地山小礫を含む）
143. 褐灰色粘土～灰黄褐色粘土（灰色細砂；0.5～１cm大の小礫及び植物遺体を含む）
144. 黒褐色粘土（0.5～３cm大の地山小礫を多く含む）
145. 褐灰色粘土と灰黄褐色砂混じり粘質土の混合（３～10cm大の礫を多く含む）
146. にぶい黄褐色粗砂（褐灰色粘土ブロック及び２～20cm大の礫を多く含む）
147. 褐灰色粘土
148. 褐灰色粘土（116・147よりやや暗；炭化物及び植物遺体を含む）
149. 褐灰色粘土～黒褐色粘土（116よりやや灰色かかる；0.2～0.5cm大の地山小礫を含む）
150. 黒褐色粘土（149より暗く、144よりやや明るい；やや灰色かかる）
151. 灰色砂（褐灰色粘土ブロック及び３～15cm大の礫を含む）
152. 暗褐色粘質土
153. 褐色粘質土（やや真砂質かかる；５～10cm大の礫を含む）
154. 灰黄褐色粘質土（132よりやや明；３～７cm大の礫を含む）
155. 灰黄褐色粘質土（132よりやや明）
156. 灰黄褐色粘質土（155よりやや暗く、132よりやや明）
157. 灰黄褐色粗砂と灰白色粗砂の混合（灰黄褐色粘質土を含む；２～20cm大の礫を含む）
158. 灰黄褐色砂混じりシルト（132より暗）
159. 灰黄褐色砂混じりシルト（132より暗）
160. 褐灰色粘土（116に類似）
161. 褐灰色粘土（160よりやや暗；木片を多く含む）
162. 灰白色粗砂（５～40cm大の礫を含む）
163. 褐灰色粘土（116よりやや灰色かかる；149よりやや明）
164. 灰色砂（灰白色砂混じり）
165. 褐灰色粘土
166. 黒褐色粘土（やや灰色かかる）
167. 褐灰色粘土（160よりやや暗）
168. 灰黄褐色粘質土
169. 褐色粘質土（やや真砂質かかる；炭及び１～５cm大の礫を含む）
170. 褐灰色粘土（167よりやや暗）
171. 褐灰色粘土（170よりやや明）
172. 褐灰色粘土と１～10cm大の地山礫の混合
173. 灰黄褐色粘質土（156より暗；黄褐色粘土ブロックを含む）
174. 灰黄褐色粘質土（156よりやや暗）
175. 黒褐色粘土（114よりやや暗；黄褐色無機質分を含む）
176. 灰色粘砂質土（151よりやや暗；やや暗青灰色かかる；１～20cm大の地山礫を密に含む）
177. 灰黄褐色粘質土～黒褐色粘質土（156よりやや暗く、114及び175よりやや明；黄褐色無機質分を含む）
178. 灰黄褐色粘質土と褐灰色粘土の混合（156より暗く、114よりやや明）
179. 灰黄褐色粘土（156よりやや暗く、褐灰色かかる）
180. 褐灰色粘土（167よりやや暗；黄灰色粘土ブロックを含む）
181. 灰黄褐色粘質土　（179よりやや暗；褐灰色粘土ブロックを含む）
182. 灰色砂（176よりやや明るく、ややオリーブ色かかる；１～10cm大の地山礫を含む）
183. にぶい黄褐色粗砂
184. 灰色砂（182よりやや暗く、151よりやや明；１～３cm大の地山小礫を含む）
185. 褐灰色粘土～黒褐色粘土（0.5～１cm大の地山小礫を多く含む）
186. 灰色砂（184よりやや暗く、151よりやや明；３～15cm大の地山礫を密に含む）
187. 褐灰色粘土（167・170よりやや明；黄褐色粘土ブロックを含む）
188. 暗褐色粘質土
189. 褐色粘質土（上位に明黄褐色真砂土）
190. 灰黄褐色粘質土と褐灰色粘土の混合
191. 黒褐色粘質土（黄褐色粘土ブロック及び0.5～1.5cm大の地山小礫を多く含む）
192. 褐灰色粘土（170よりやや明）
193. 黄褐色礫層
194. にぶい黄褐色砂と暗褐色粘質土と２～５cm大の地山小礫の混合
195. 褐灰色砂（３～７cm大の礫を密に含む）
196. 灰色粘砂質土
197. オリーブ黒色粘土
198. 褐灰色粘土（187よりやや暗）
199. 黒褐色粘土（１～２cm大の地山小礫を含む；やや灰黄褐色かかる）
200. 黒褐色粘土（198より暗；0.5cm大の地山小礫及び未分解植物遺体を含む）
201. 褐灰色粘土（167・180・187よりやや明るく、やや褐灰色かかる）
202. 黒褐色粘土（199よりやや暗く、200より明；0.5cm大の地山小礫を含む）
203. 灰黄褐色細砂混じり粘土（炭化物を含む）
204. 灰黄褐色粘土（203よりやや暗）

0　5m

第11図　Ⅲ区調査地実測図（１）



第12図　Ⅲ区調査地実測図（2）

3）Ⅲ区の調査

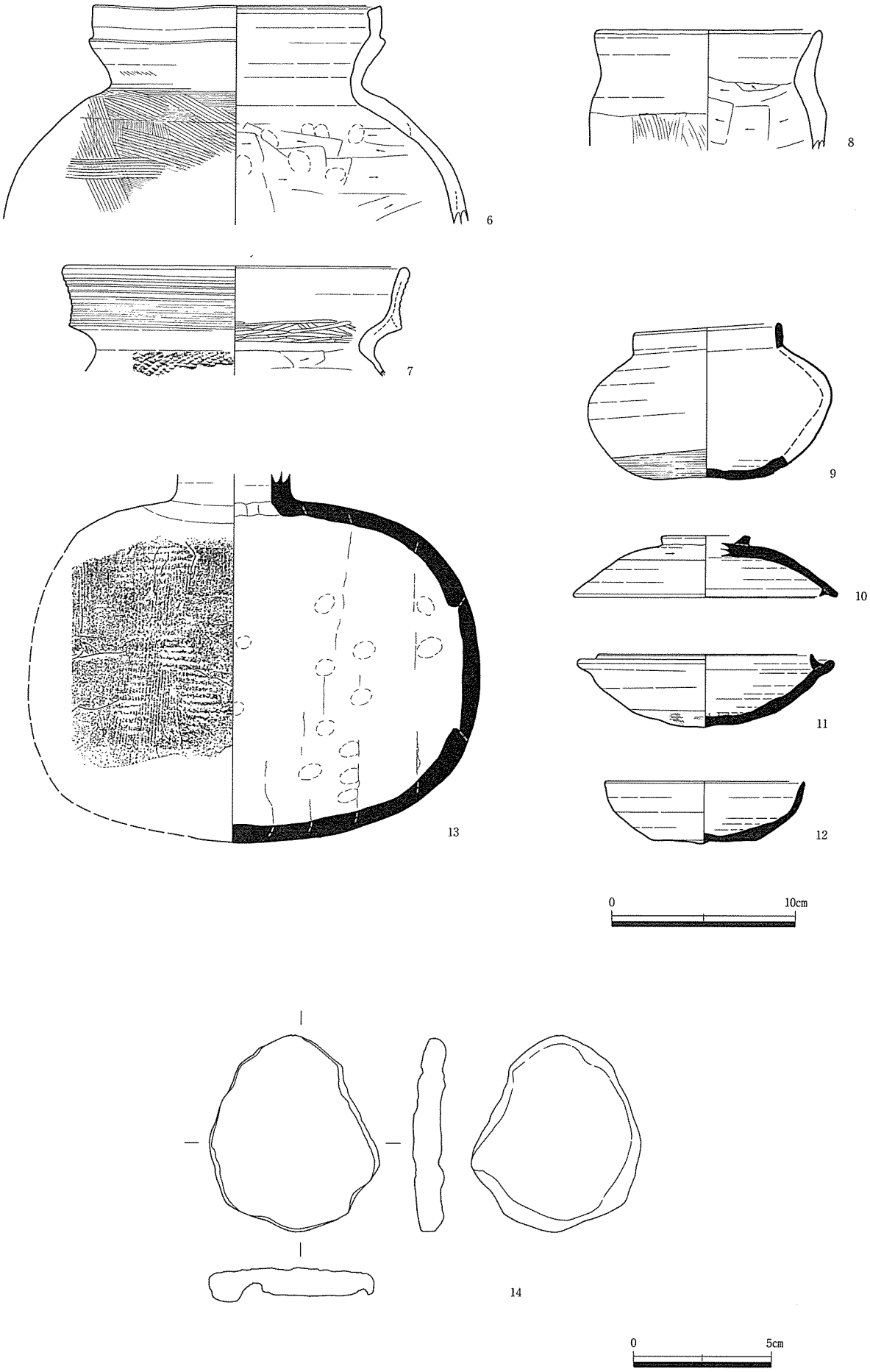
杭列（2）（第12・13図、PL18）

調査区の中央からその北側に位置し、各杭の遺存検出標高は5.9～6.2m程度である。南北に細長い調査区を南南西から北北東に緩い円弧状に横断する形で検出した。現状での主軸はN-10°-E程度にとり、検出長は17.75m程度である。調査範囲内で確認できた杭の数は28本であるが、基本的には遺存長31～69cm程度の角杭が使用されており、僅かに95cm程度の丸杭が認められる。部分的には長さ3m以上、幅19～36cm程度の板材を横長に並べて杭で固定した状況が認められる。また周辺の平面観察では、この杭列周辺に幅約1m、長さ23m程度に渡って灰黄褐色および灰白色の砂層が認められ、この砂層とその下の褐灰色粘土および黒褐色粘土層に遺物の集中が認められる。特に検出杭列の北側では、調査地境の東側壁面付近で斎串等の木製祭祀具が重なるように密集して検出された(第13図)。さらに壁断面の観察では、浅い溝状に切り上がる層序の変化が認められる(第150層、165・166層)。このことから本杭列の性格としては、溝状遺構あるいは旧流路の護岸施設の可能性を考えておきたい。遺物としては、杭列周辺から須恵器(杯蓋(10)、杯身(11、12)他)片、金属の溶解物(14)および多くの木製品(農具の鍬、発火具の火きり臼(W22)、装身具の櫛、容器の槽、人形(W14、15)・馬形(W16～W19)・刀形・斎串(W3～W13)といった祭祀具、自然木等)が検出されている。このうち第13図に示した祭祀具密集地では、斎串等が杭留めされた横長板材に一部乗りかかる形でその東側にかけて検出された。出土状況からはこの位置で使用されたのではなく、まとまって流れ着いたものと考えられるが、その流れ具合から概ね三つのまとまりが認められ、それぞれ人形や斎串の22・34・34の個体数を確認している。なお時期については、周辺の出土遺物から奈良時代頃を考えておきたい。

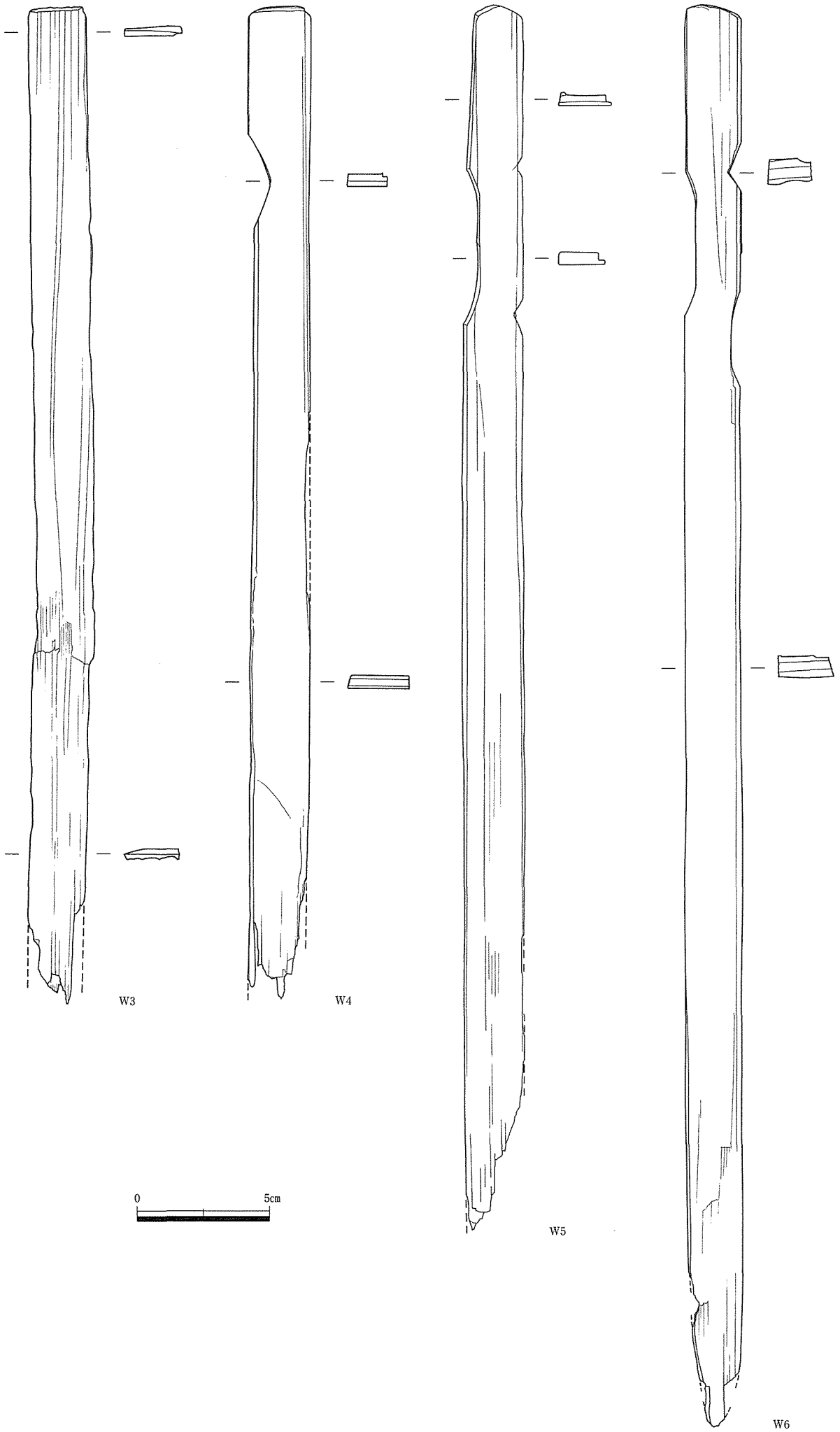
出土遺物(第11～20図、PL23～27)

Ⅲ区でも、土器類は少なく木器が多く検出されたが、そのうち遺存状況の比較的良好な土器と金属溶解物と、木器のうち祭祀具・農具・発火具を図化した。杭列(2)よりやや南の褐灰色粘土(第171)層検出の甕(6)は、短く立ち上がる複合口縁部をもち体部は比較的厚手で肩上部にハケ目調整がなされる。杭列(2)よりやや北の褐灰色粘土～灰黄褐色粘土(第143)層検出の甕(7)は、やや外反する口縁部外面に8条の平行沈線、肩部に連続刺突文の押し引きを施し、口頸部内面ヘラ磨き、口縁部内面ナデ調整がなされる。杭列(2)付近の黒褐色粘土(第150)層検出の甕(8)は比較的厚い器壁をもつ。杭列(2)よりやや南の褐灰色粘土(第171)層検出の短頸壺(9)は、直線的にたつ短い口縁をもち体部から底部はヘラ削り、体部ヘラ削り後ナデ調整である。環状つまみ付蓋(10)、杯身(11、12)はいずれも杭列(2)付近の灰黄褐色粗砂と灰白色粗砂の混合(第157)層検出で、体部から頸部の遺存の横瓶(13)は、(9)と同様の第171層の検出である。また(10)～(12)と同様な位置から金属の溶解物(14)が検出されている。分析の結果純度98%以上の銅で、ごく微量のけい素・銀・硫黄が含まれることが判明しているが、現在のとこ

第13図　Ⅲ区遺物出土状況図

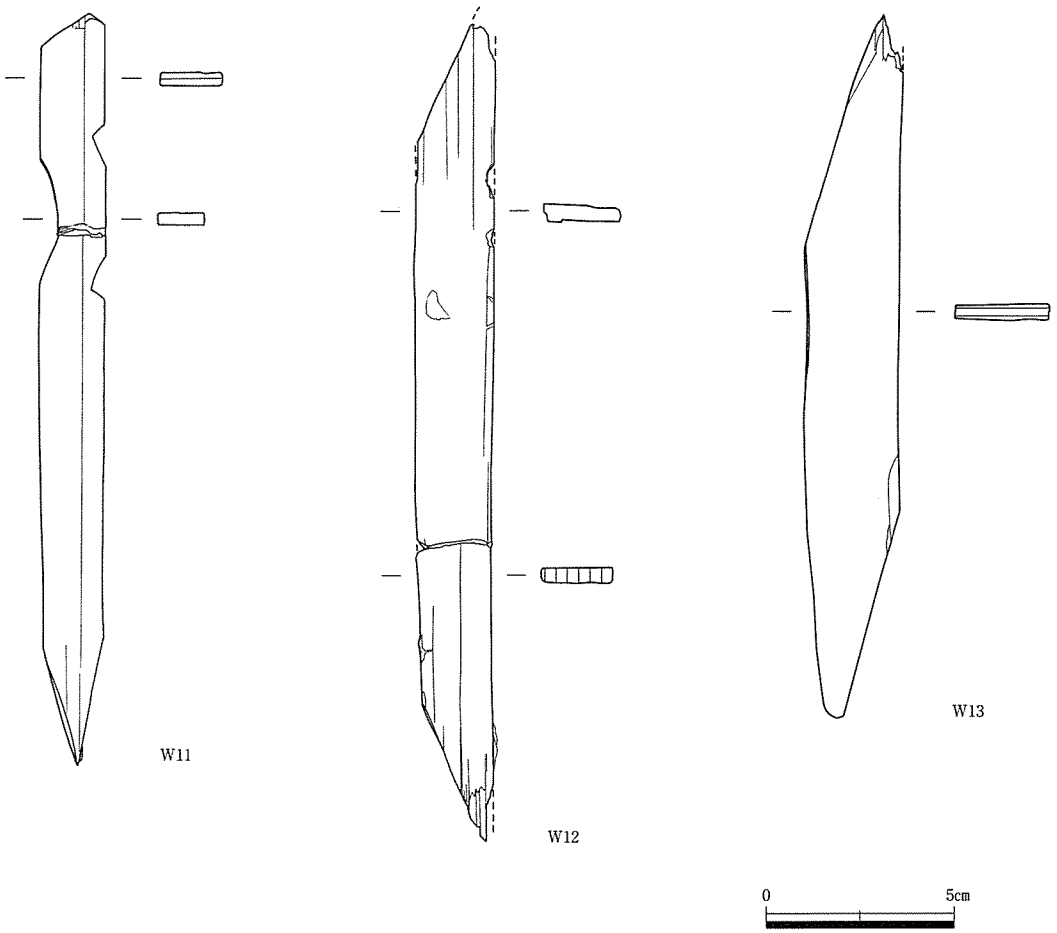


第14図　Ⅲ区出土遺物実測図（１）



第15図　Ⅲ区出土遺物実測図（２）

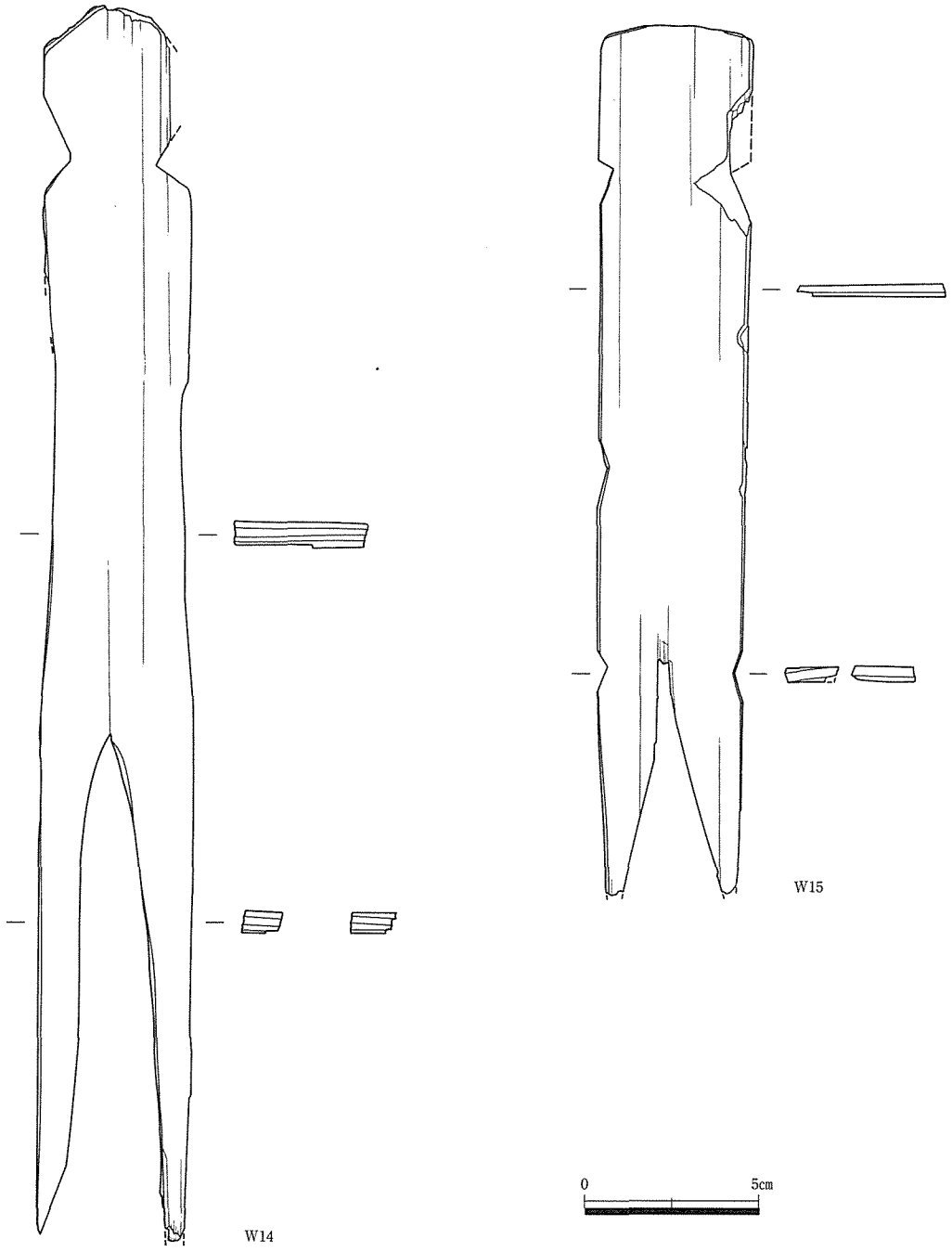
第16図　Ⅲ区出土遺物実測図（3）



第17図　Ⅲ区出土遺物実測図(4)

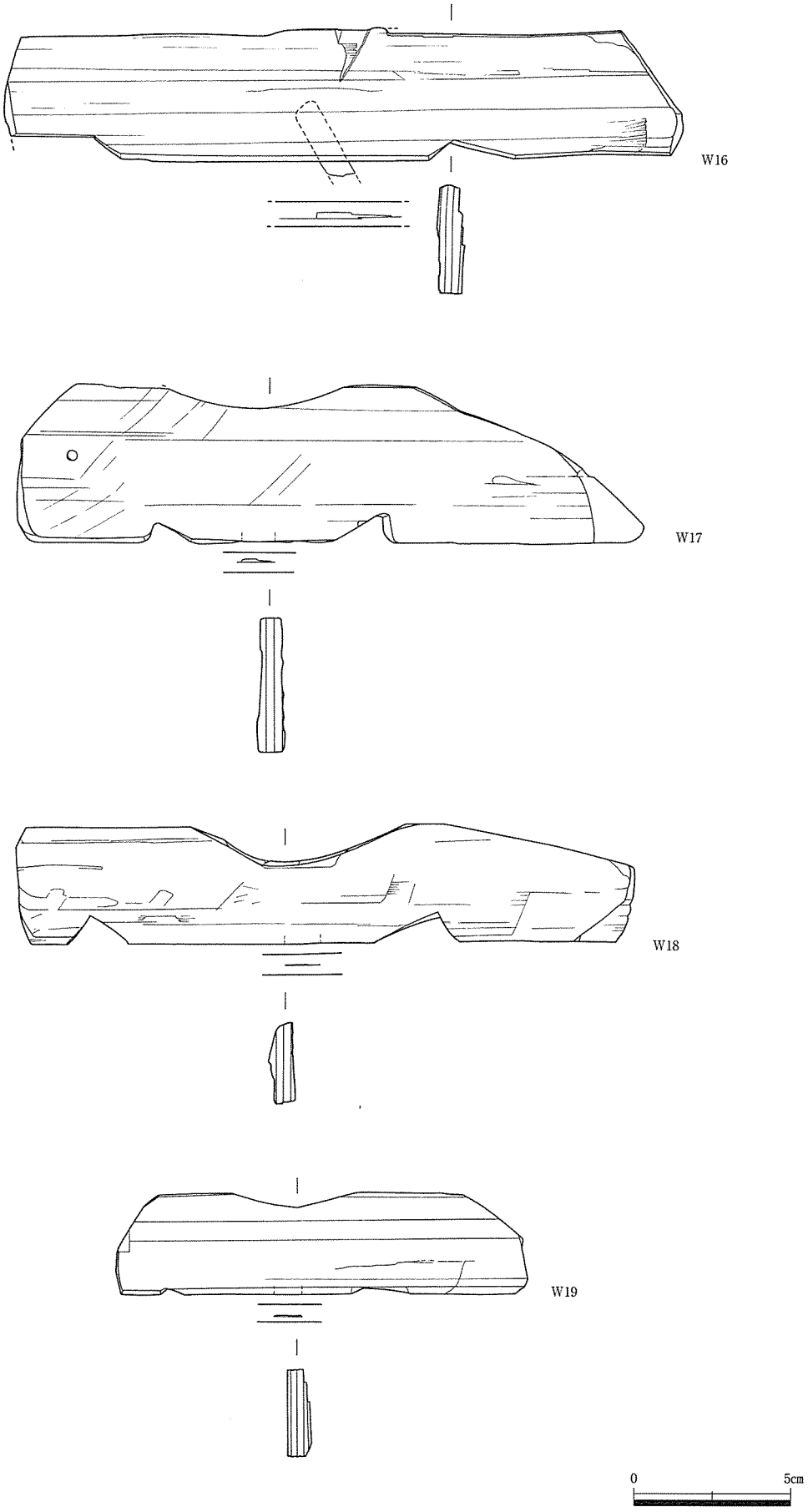
ろ詳細は不明である。

多量に検出された木器のうち、図化した(W3)～(W13)は斎串である。(W3、4)は細長い薄板の上端を水平に切り、うち(W4)は上端よりやや下位の片側にV字状の切欠きを行う。(W5～W9)は上端を圭頭状あるいはやや圭頭状に作るもので、そのやや下位に(W5)は片側に2ケ所のV字状の切欠きとその反対側に1ケ所の浅い皿状の切欠きを行う。(W6)は片側に1ケ所のV字状の切欠きと1ケ所の浅い皿状の切欠き、そしてその反対側に1ケ所の浅い皿状の切欠きを行い、下端は両側から削り尖らせる。(W7)は片側に1ケ所のV字状の切欠きとその反対側に1ケ所の浅い皿状の切欠きを行い、下端は両側から削り尖らせる。(W8)は片側に1ケ所のV字状の切欠きと1ケ所の浅い切掛け、そしてその反対側に1ケ所の浅い皿状の切欠きを行い、下端は両側から削り尖らせる。(W9)は左右一対の浅い切掛けを行う。(W10)は細長い棒状角材の上端をやや水平に切り、下端を削って尖らせる。(W11)は(W5)の小型版あるいは馬形の一端を両側から削り尖らせたかのような形状を呈する。(W12)は細長い薄板の両端を斜めに切り落として平面形が台形状となる。小口側の一端には複数の切掛けが認められる。(W13)は同様に細長い薄板の両端を斜めに切り落とすが平面形は平行四辺形となる。(W14、15)は人形で、長方形薄板の両長側に2～3対の切欠きを行って頭部・手部・腰部・脚部表現とし、下端部には深い切り込みを入れることで股の表現としている。(W16～19)は馬形で、(W16)が背部にやや出っ張り状の鞍表現の残るいわゆる「飾り馬」で、その他が背部を浅く弧状に切欠く「裸馬」である。いずれの腹部にも使用時に別の棒状の薄板等を差し込んだと見られる痕跡が認められる。(W20)は柄振(横鍬)で、両上端部から左右側面は円弧状を呈し、刃部は鋸歯状で6枚の歯をもつ。全長は31.85cm、幅は10.85cmを測る。田下駄(W21)は、長方形の足板の両長側に2対の切欠けを入れており、長さ37.45cm、幅12.7cmを測る。(W

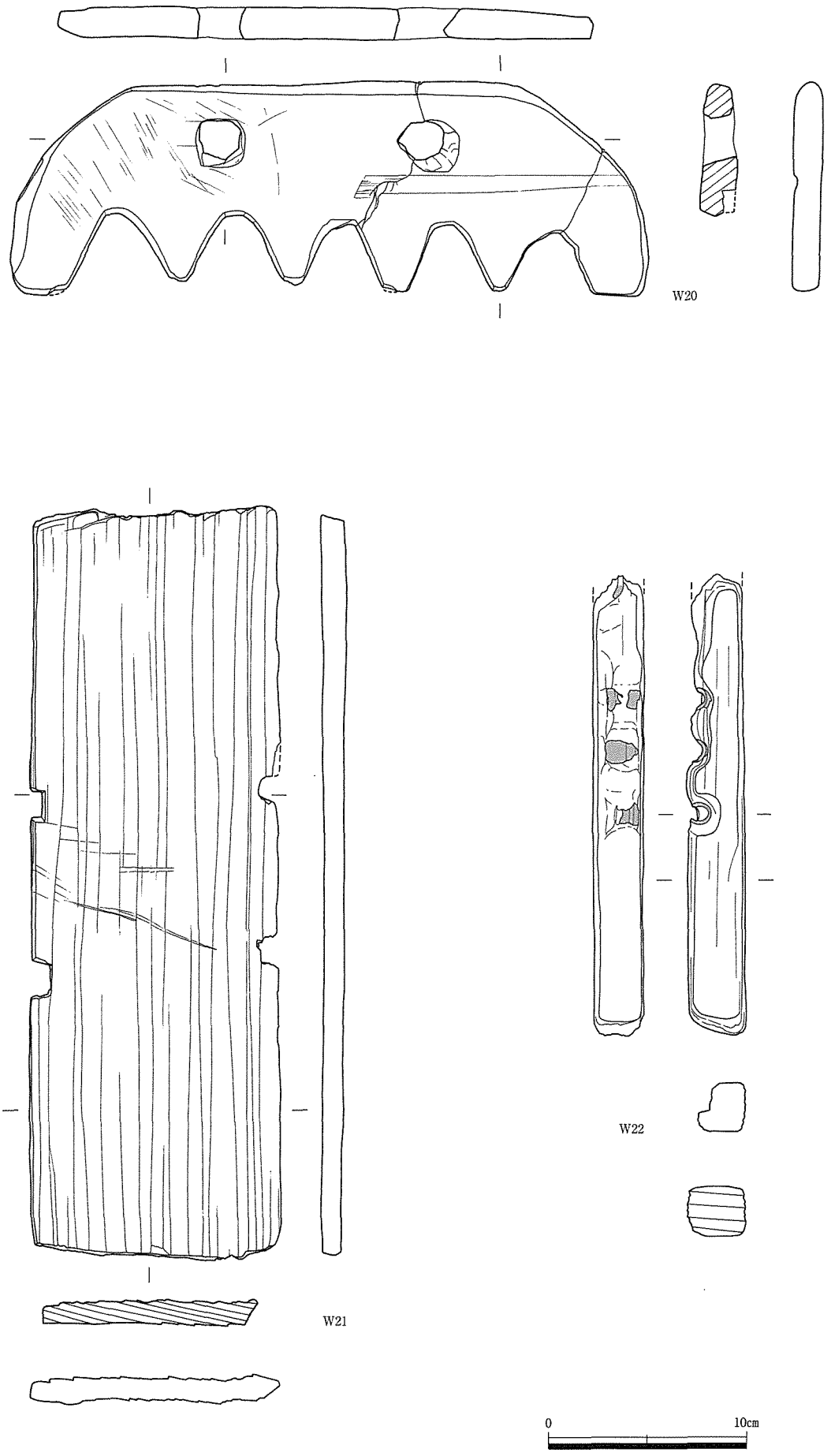


第18図　Ⅲ区出土遺物実測図(5)

22)は発火具の火きり臼である。細長い角材を利用しており、3個の火きり穴と欠失したと見られる端部に火きり穴があった可能性も考えられる焦げ跡が認められる。遺存長22.9cm、幅2.9cm、厚さ2.45cmを測る。なおⅢ区出土遺物としては内面に暗文の認められる土師器杯や2ケ所に切欠けのなされた石錘などがあるほか、木製品として、上述のほかに、農具の柄振(横鍬)1点・鋤1点・田下駄1点・田舟1点、容器の槽1点、祭祀具の人形9点・馬形9点・刀形1点・斎串153点、建築材の梯子1点、土木材の角杭21点・板状杭5点・丸杭6点、その他の板状材5点などが出土している。



第19図　Ⅲ区出土遺物実測図（６）



第20図　Ⅲ区出土遺物実測図（７）

Ⅲ．まとめにかえて

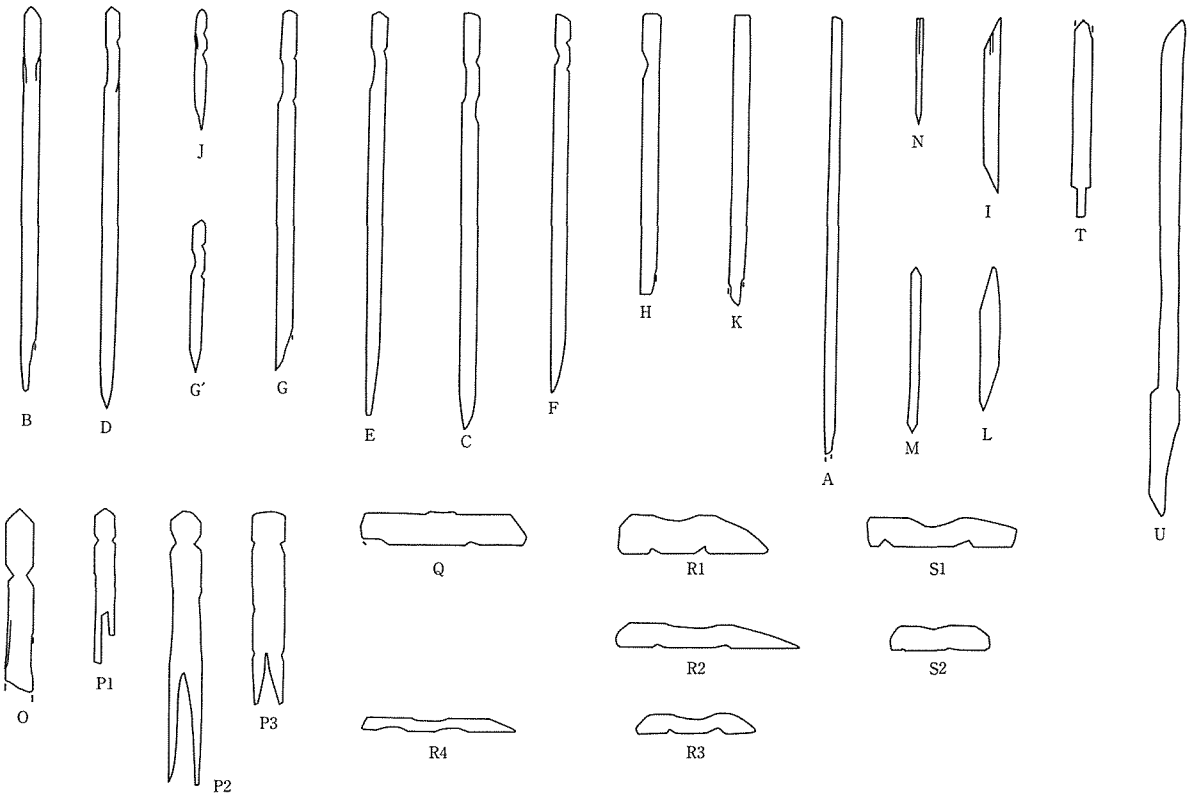
上述の調査結果報告には詳細な検討にまだ浅く不十分なところもあるが、以下調査の所見等にふれることでごく簡単ではあるがまとめの代わりとしたい。

今回の調査は近年の踏査や試掘調査によって認知された大坪イカウ松遺跡の南南東限と想定される付近の南北長180m足らず、上面幅３m程度の細長い範囲でのものであった。オープン掘削で湧水もあり壁面崩壊の危険等も考慮して、段掘り・緩い法勾配での掘り下げであったため掘り下げるにしたがってさらに狭く細長い調査地となったが、詳細不明の溝状遺構１条と古墳時代以降および奈良時代頃の護岸施設あるいは土留め施設の可能性が考えられる木組遺構や杭列を検出した。

層序的には、現地表面下約50cmの旧ほ場整備造成土直下からSD-01が、地表面下約60cmの褐灰色粘土直下から杭列(１)、(２)が、そして地表面下約１mの黒褐色粘土層中あるいは同粘土層上面から木組遺構(１)、(２)が検出されている。また今回の調査は工事による遺跡への影響範囲内においてということで、Ⅱ区南半とⅢ区の北側半分程度ににについては無遺物層までの確認調査は行っていないが、Ⅰ区西半・Ⅱ区北半および鳥取市教育委員会が調査を実施したⅣ区の調査では、地表面下1.1～1.2m程度の黒褐色粘土層あるいは灰黄褐色粘土層から縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、木器といった遺物が検出されており、大坪イカウ松遺跡の本調査地には、３～４面の遺構面が部分的ながら遺存していることが判明した。但しそれらは調査地の西から東に行くに従って、また北から南に行くに従って次第に希薄となることも確認された。

今回調査で検出した遺構のうち、詳細不明のSD-01以外を、全容が不明瞭であったため矢板状板材使用の有無で便宜上杭列(１)、(２)と木組遺構(１)、(２)とした。これは長さ２～３m、幅30cm程度のやや大きめの板材を横に並べて杭で固定するか、あるいは長さ80～120cm以上、幅13～40cm程度の板材をその側辺を接するように縦矢板状に打ち込んでさらにそれらを杭で固定するかといった工法の違いではあるが層序的にも異なっており時期差による違いである可能性もある。またその性格については、断面観察や平面観察による砂帯の部分的な堆積状況等から、これらの遺構のうち木組遺構(２)以外は溝状遺構または旧流路に関連した護岸施設を想定している。ただ木組遺構(２)については不明な点が多く他の遺構ほどの根拠もないが、何らかの護岸施設あるいは土留め施設の可能性は考えられまいか。なお調査地全体を見てみると、検出遺構のうち杭列(１)と(２)は構造的に類似しており、層序的にも同様な層位の検出と考えられる。このことは両遺構が別々の離れた位置から検出されているものの、本来同一遺構で、旧地形に沿って調査地内に見え隠れしているものの可能性も考えられる。時期的には、周辺あるいは下層出土遺物から杭列が奈良時代で、木組遺構がそれ以前で古墳時代以降と考えられる。

今回の調査で出土した土器・石器・金属器は全調査地で、10コンテナにも満たない程度であるが、多量の木製品が出土している。このうち農具としては、Ⅲ区検出の鋸歯状の刃をもつ柄振(横鍬)２点(W20)、一木鋤１点、田舟１点、木錘１点、Ⅰ・Ⅱ区から足板の長側に切欠けを２対入れるもの２点(W21)とⅢ区から足板に鼻緒孔２ケをもつもの１点の計３点の田下駄、Ⅱ区から穂摘具の木庖丁２点(W2)がある。装飾具としてはⅢ区から半円形に近いタイプの横櫛１点と板目材・小判型で足跡から右足のものと見られるよく使いこまれた下駄１点がある。発火具としてはⅢ区から火きり臼が１点(W22)あり、容器としては、Ⅱ区の曲物蓋１点とⅢ区の槽１点がある。建築材として梯子がⅡ区とⅢ区から計２点あり、土木材としては角杭がⅠ区２点・Ⅱ区21点・Ⅲ区21点の計44点、板杭がⅠ区11点・Ⅱ区６点・Ⅲ区５点の計22点、丸杭がⅡ区３点・Ⅲ区６点の計９点ある。またそのほかにも板状材がⅠ区９点・Ⅱ区19点・Ⅲ区５点の計33点ある。そして今回の調査で最も多く出土したのが、木製祭祀具で、この大坪イカウ松遺跡を特徴づける遺物とも言える。これらの多くはⅡ区とⅢ区の杭列付近から密集して検出されている。まだ整理途中で断片化したものも多くその個体数は増加するものと見られるが、完形品かそれに類するものを数えると、人形がⅡ区８点・Ⅲ区11点(W14、15)の計19点、馬形がⅡ区４点・



第21図　調査地内出土祭祀具模式図(S＝1：10)

Ⅲ区13点(W16～W19)の計19点、斎串がⅡ区21点・Ⅲ区164点(W3～W13)の計185点(他に現在のところ上端部片69片あり、合計254点)、剣形がⅡ区から1点(W1)、刀形がⅢ区から1点あり、総数は、225(上端部片を加えると294)点を数える。ここではこれらの簡単な仕分けを行っておきたい。但しその呼称については、まだ整理中のため混乱を避けるために現段階での便宜的な呼称をそのまま用いており、体系だてたものではないことをおことわりしておく(第21図)。

斎串

細長い薄板や棒状のものの一端を削って尖らせた形のもので、今回最も多く検出された。切欠きや切り掛けの状況、上端部の形状、大きさ等によってA～N、G′に分けている。

Aタイプ…細長い棒状角材の上端をやや水平に切り、下端を削って尖らせたもので、他の薄板材を用いるものとは異なる。大きなものでは遺存長ながら60cm弱のものも認められる。Ⅲ区から16点出土。

Bタイプ…細長い薄板の上端を圭頭状に作り、それよりやや下位左右両側面に一対の浅い切掛けを行うもので、下端は両側から削り尖らせる。長さは50cm余りである。Ⅱ区から7点、Ⅲ区から37点の計44点が出土。

Cタイプ…細長い薄板の上端をやや圭頭状を意識するように作り、そのやや下位の片側面に1ケ所のV字状の切欠きと1ケ所の浅いⅢ状の切欠き、そしてその反対側面に1ケ所の浅いⅢ状の切欠きを行うもので、下端は両側から削り尖らせる。長さは55cm程度である。Ⅲ区から1点出土。

Dタイプ…細長い薄板の上端を圭頭状に作り、それよりやや下位の片側面に1ケ所のV字状の切欠きと1ケ所の浅い切掛け、そしてその反対側面に1ケ所の浅いⅢ状の切欠きを行うもので、下端は両側から削り尖らせる。長さは50cm余りである。Ⅱ区から1点、Ⅲ区から15点の計16点が出土。

Ｅタイプ…細長い薄板の上端を圭頭状に作り、それよりやや下位の片側面に１ケ所のＶ字状の切欠きとその反対側面に１ケ所の浅いⅢ状の切欠きを行うもので、下端は両側から削り尖らせる。長さは50cm余りである。Ⅲ区から２点出土。

Ｆタイプ…細長い薄板の上端をやや圭頭状を意識するように作り、そのやや下位の片側面に２ケ所のＶ字状の切欠きを行い、その反対側面にもやや幅広のＶ字状の切欠きを行うもので、下端はやや不明瞭ながら両側から削り尖らせる。長さは50cm程度である。Ⅲ区から１点出土。

Ｇタイプ…細長い薄板の上端を圭頭状に作り、それよりやや下位の片側面に２ケ所のＶ字状の切欠きとその反対側に１ケ所の浅いⅢ状の切欠きを行う。下端は欠失のため不明だが、長さは50cm程度が想定される。Ⅱ区から１点、Ⅲ区から14点の計15点が出土。

Ｇ′タイプ…細長い薄板の上端をやや圭頭状を意識するように作っている以外は、Ｇタイプの小型版といえる。長さは20cm余りである。Ⅲ区から１点出土。

Ｈタイプ…細長い薄板の上端を水平に切り、それよりやや下位の片側面にＶ字状の切欠きを行う。下端は欠失のため不明だが、長さは35cmをこえる。Ⅲ区から３点出土。

Ｉタイプ…細長い薄板の両端を斜めに切り落として平面形が台形状となる。小口側の一端には複数の切掛けが認められるものが多い。長さは20cm余りである。Ⅱ区から８点、Ⅲ区から42点の計50点が出土。

Ｊタイプ…細長い薄板の上端を圭頭状に作り、それよりやや下位の片側面に２ケ所のＶ字状の切欠きとその反対側に１ケ所の浅い切掛けを行うもので、下端は両側から削り尖らせる。長さは15cm余りと小型で、Ⅲ区から２点出土。

Ｋタイプ…細長い薄板の上端を水平に切るもので、下端は欠失のため不明だが、長さは35cmをこえる。Ⅲ区から５点出土。

Ｌタイプ…細長い薄板の両端を斜めに切り落として平面形は平行四辺形となる。小口側に切掛けは認められない。長さは20cm程度である。Ⅱ区から１点、Ⅲ区から11点の計12点が出土。

Ｍタイプ…細長い薄板の両端を圭頭状に作るもので、長さは20cm余りと小型である。Ⅲ区から１点出土。

Ｎタイプ…細長い薄板の上端を水平に切るもので、下端は両側から削り尖らせる。長さは15cm程度と小型で上端には切掛けと見られる割れが認められるものがある。Ⅱ区から３点、Ⅲ区から14点の計17点が出土。

人形

手の表現方法によって大きくはＯ・Ｐ二つのタイプに分けられる。そしてＰは頭部・手部・腰部・脚部表現でさらに細分が可能とも思われるがここでは模式図を載せるに留めたい。

Ｏタイプ…細長い薄板の上端を圭頭状に作り、それよりやや下位の両側面にＶ字状の切欠きを行って頭部を作り出す。そしてその下の体部両側面に下方から深い切掛けを行って手の表現とするものである。下位は欠失で不明ながら、遺存長は25cm以上である。Ⅱ区から１点出土。

Ｐタイプ…細長い薄板の上端からやや下位の両側面にＶ字状の切欠きを行って頭部を作り出す。その下の体部両側面には、切掛けによる手の表現の代わりに切欠きを行って腰部表現とする。下位は、下端部から深い切り込みを入れることで股を表現している。なお、頭端部の作り方に圭頭状のものや水平に切ってその両端をやや丸めるもの、あるいは足先を水平に切るものと尖らせるもの、股ぐりを尖らせるかそうでないものなど、まだ細分可能か。Ⅱ区から10点、Ⅲ区から８点の計18点が出土。

馬形

鞍表現の有無と端部のおさめ方の違いによって大きくはQ・R・Sの三つのタイプに分けられる。

Qタイプ…細長い薄板の一長辺を上としてそのほぼ中央をM字状やや突出させて切り欠き、鞍を表現した、いわゆる「飾り馬」である。腹部にあたる下位長辺中央付近には使用時に別の棒状の薄板等を差し込んだと見られる痕跡が認められる。Ⅲ区から1点出土。

Rタイプ…細長い薄板の一長辺を上としてそのほぼ中央を浅く弧状に切欠く、いわゆる「裸馬」である。尻部は斜めに尖って切り落とされるもので、下辺の切欠きにV字状のものと浅いⅢ状のものがある。

Sタイプ…細長い薄板の一長辺を上としてそのほぼ中央を浅く弧状に切欠く、いわゆる「裸馬」である。尻部が辺をもつように切られる点がRタイプとは異なる。

剣形

薄板状のものではなく、やや立体的なものである。

Tタイプ…鞘から抜いた状態のもので、断面菱形の剣身と関部を削り込んで茎を柱状に造り出す。Ⅱ区から1点出土。

刀形

Uタイプ…鞘から抜いた状態のもので、細長い薄板から刀身を削りだし、柄をとび出すように表現している。長さは75cm程度である。Ⅲ区から1点出土。

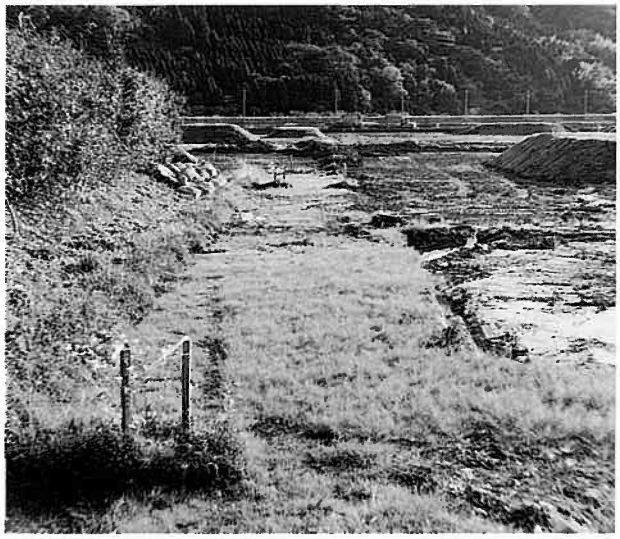
なお、上述のとおり出土した木製祭祀具の中には断片化したものも多く、今後新たなタイプが見つかる可能性がある。また斎串では、今回は別タイプに分けているものの今後の検討で、同タイプの亜種と見るものも出てくると思われる。

今回の大坪イカウ松遺跡の調査は当初考えていた以上の大きな成果をあげるものとなり、発掘調査から報告書の刊行まで多くの方々の協力・指導を得た。しかしながら力量不足と諸事情のためそのご厚意を十分生かすことができず、本報告書ではそのほとんどが簡単な事実関係の報告となった。ただこれまで鳥取市内でこれほどまとまって木製祭祀具が出土した例はほとんどなく、今後は今回行った大まかなタイプわけなどを基礎資料の一部として、時期的な変遷の問題や、層序との関係、あるいは本遺跡からの距離が3km余りの範囲にある祭祀遺物が検出された周辺の遺跡との関係などさらに整理・検討していかなければならない。これまで援助いただいた皆様にあらためて感謝を申し上げるとともに、今後とも変わらぬご叱責、ご鞭撻をいただければ幸いです。

写 真 図 版

1．調査地遠景(東南東から)

2．調査地近景(北西から)



3．調査前Ⅰ区全景(西から)

4．調査前Ⅱ・Ⅲ区全景(北から)

PL. 2

1．Ⅰ区東半掘下後(東から)

2．Ⅰ区掘下後全景(西から)

1．Ⅰ区西半北壁断面
（南西から）

2．Ⅰ区東半北壁断面
（南東から）

3．Ⅰ区東壁断面
（西から）

1．Ⅰ区SD-01検出状況(北東から)

2．Ⅰ区SD-01断面(南東から)

3．Ⅰ区SD-01掘下時全景(西から)

4．Ⅰ区木組遺構検出状況(1)(南東から)

（断面、南西から）

（断面、北東から）

（北東から）

（南東から）

（南東から）

（南西から）

（北東から）

1．Ⅰ区木組遺構断面および検出状況（2）

2．Ⅰ区遺物検出状況（南から）

1．Ⅱ区北半掘下後全景(北から)

2．Ⅱ区北半掘下後全景(南から)

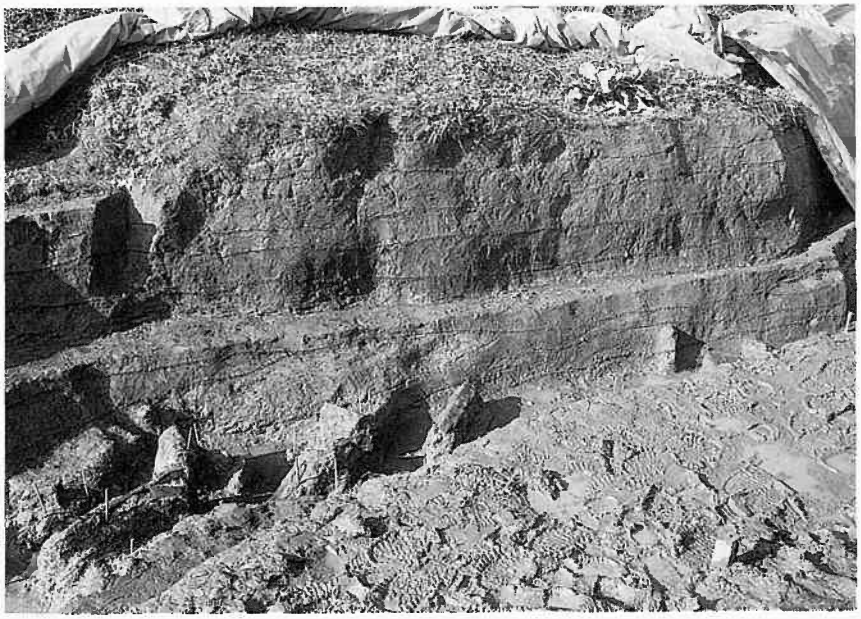
1．Ⅱ区南半掘下後全景(北から)

2．Ⅱ区南半掘下後全景(南から)

PL. 8

1．Ⅱ区北半西壁断面
（北東から）

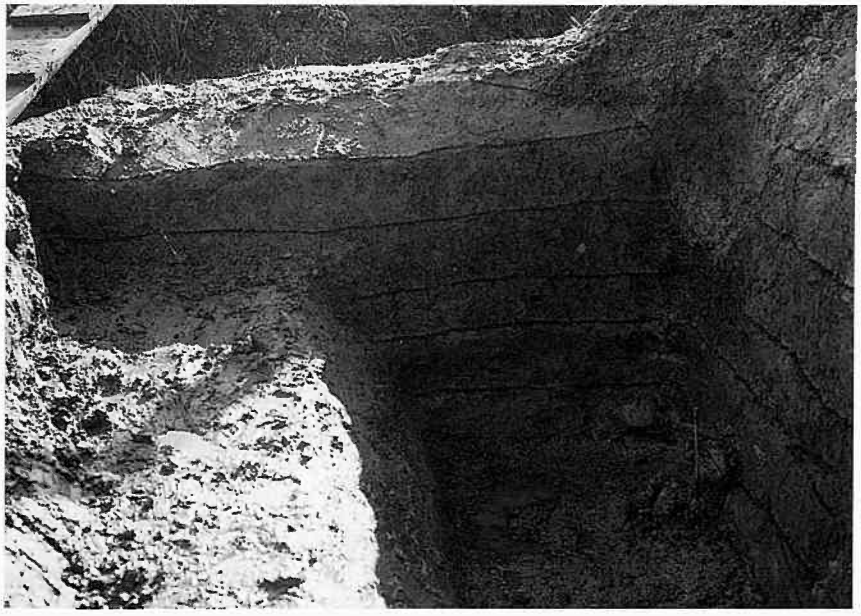
2．Ⅱ区南半西壁断面
（南東から）



3．Ⅱ区南半折れ曲り部
西壁断面（南東から）

1．Ⅱ区南半西壁断面
（南東から）

2．Ⅱ区南半西壁断面
（南東から）

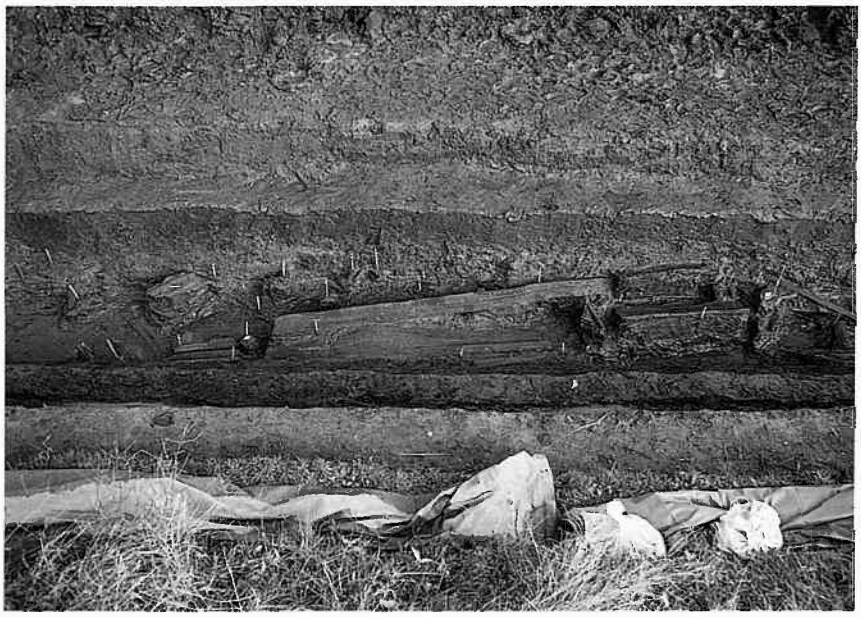


3．Ⅱ区南壁断面
（北から）

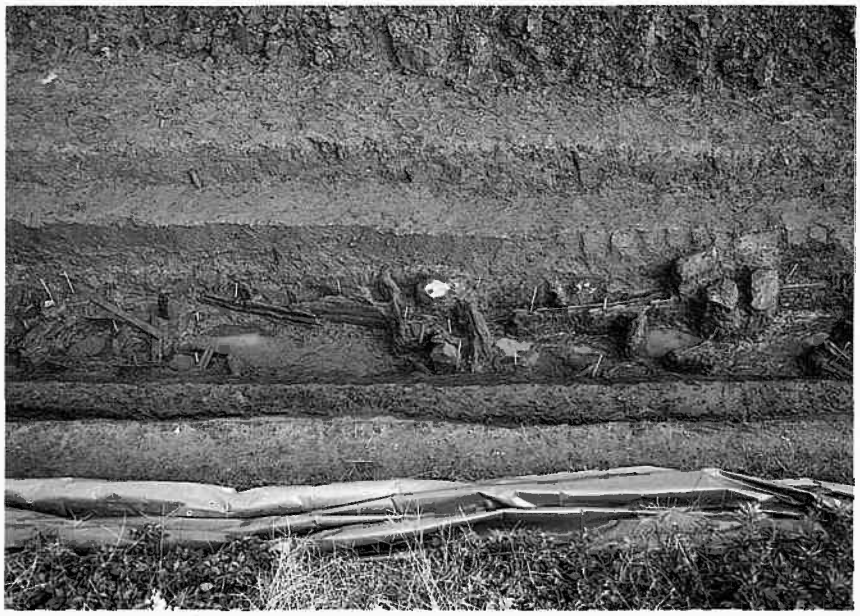
1．Ⅱ区南半杭列および遺物検出状況（１）（南南東から）

2．Ⅱ区南半杭列および遺物検出状況（２）（南南東から）

1．Ⅱ区南半杭列部分（1）
（北北東から）



2．Ⅱ区南半杭列部分（2）
（西から）



3．Ⅱ区南半杭列部分（3）
（西から）

1．Ⅱ区南半木組遺構検出状況（1）
（南東から）

2．Ⅱ区南半木組遺構検出状況（2）
（南東から）

3．Ⅱ区南半木組遺構検出状況（3）
（東から）

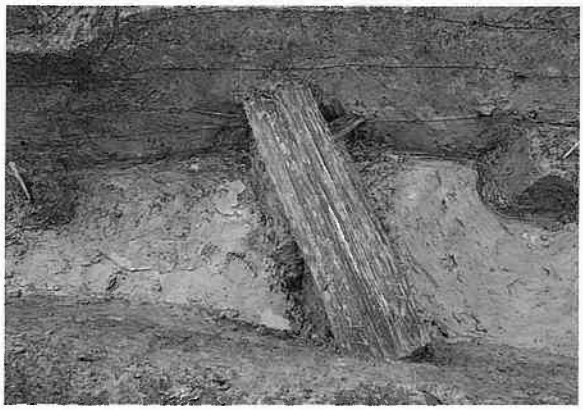
4．Ⅱ区南半木組遺構部断面
（東から）

（北半、東から）

（北半、東から）

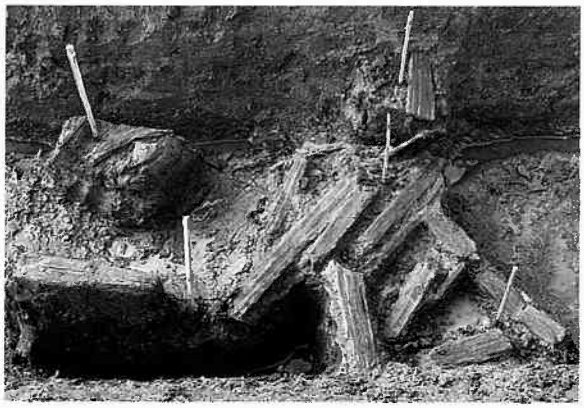
（北半、東から）

（北半、東から）



（北半、東から）

（北半、東から）



（南半、東から）

（南半、東から）

1．Ⅱ区遺物検出状況（1）

（南半、東から）

（南半、東から）

（南半、東から）

（南半、東から）

（南半、東から）

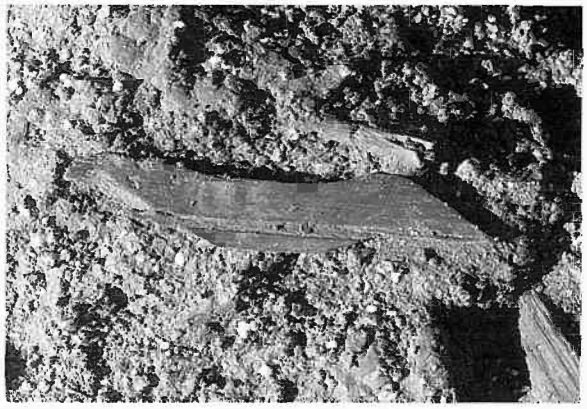
（南半、東から）

（南半、南東から）

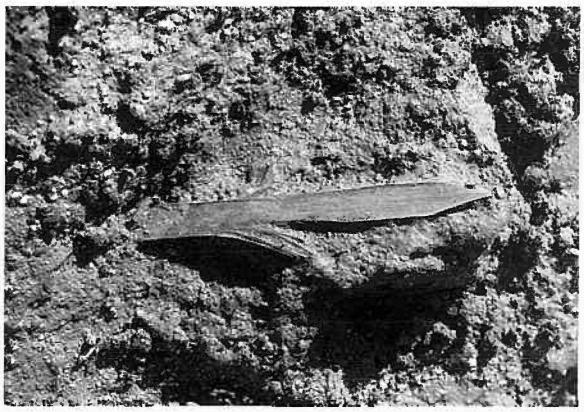
（南半、東から）

1．Ⅱ区遺物検出状況（2）

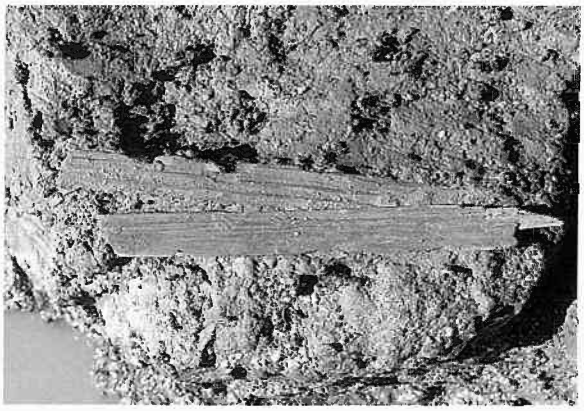
（南半、東北東から）



（南半、東南東から）



（南半、北西から）

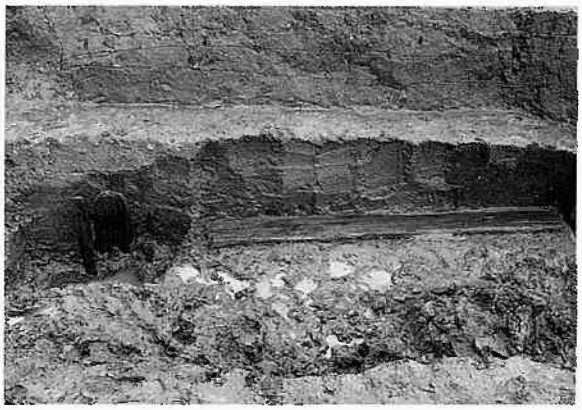


（南半、東から）

（南半、東から）

（南半、東から）

（南半、南南東から）



（南半、東から）

1．Ⅱ区遺物検出状況（3）

1．Ⅲ区掘下後全景(北から)

2．Ⅲ区掘下後全景(南から)

1．Ⅲ区西壁断面
（南東から）

2．Ⅲ区西壁断面（部分）
（南東から）

3．Ⅲ区北壁断面
（南から）

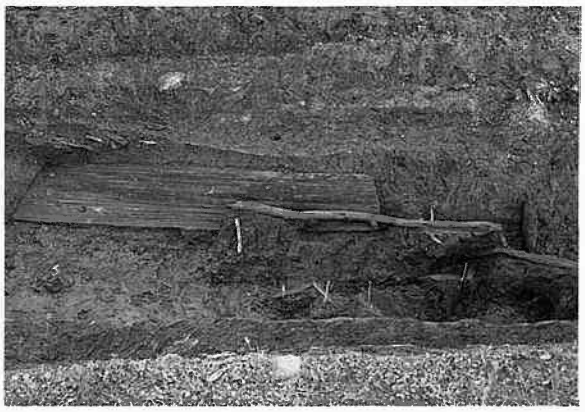
PL. 18

1．Ⅲ区東壁断面および
杭列検出状況（1）
（南西から）

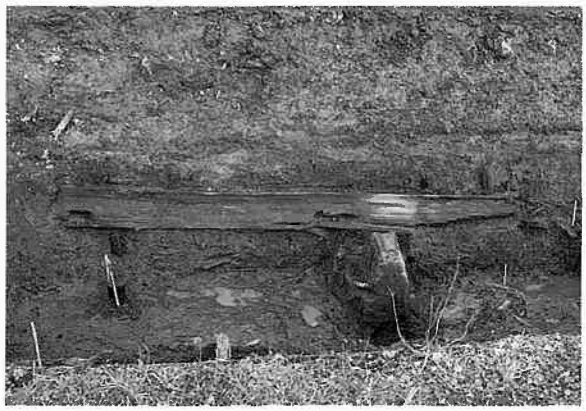
2．Ⅲ区杭列検出状況（2）
（南南東から）

3．Ⅲ区杭列検出状況（3）
（北北東から）

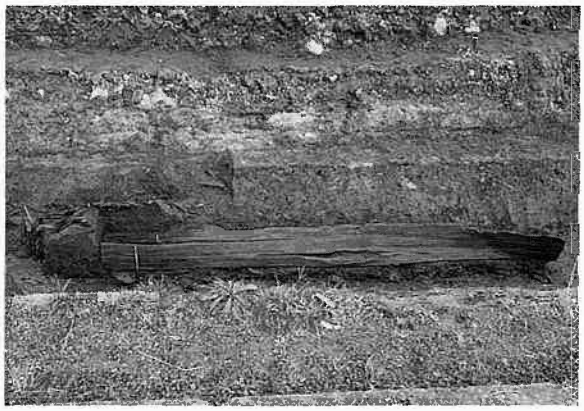
（西から）



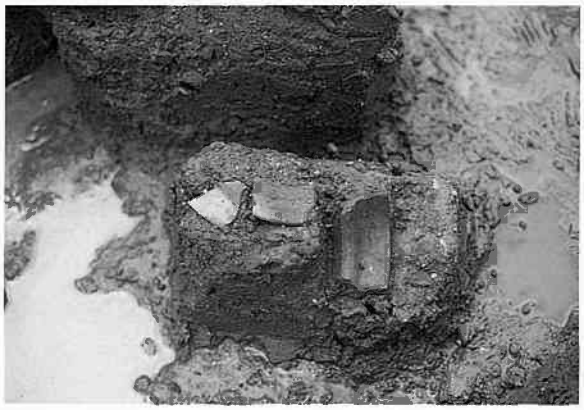
（西から）



（西から）



（西から）



（南東から）

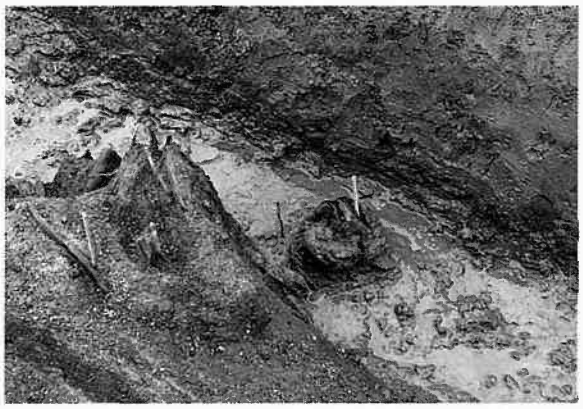
（東から）

（南東から）

（東から）

Ⅲ区遺物検出状況（１）

（東から）



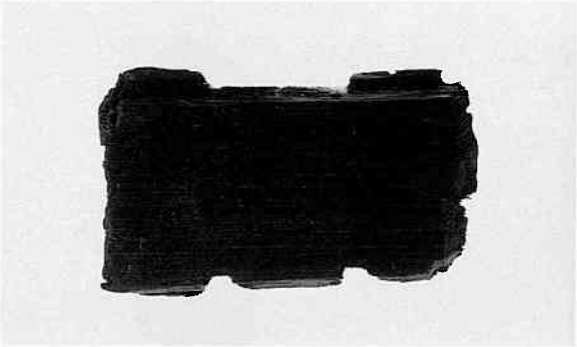
（北東から）

（東から）

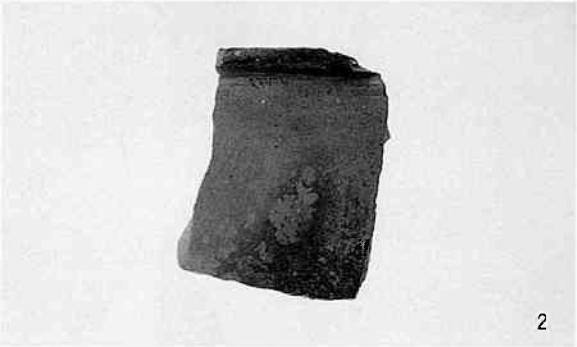
（西から）

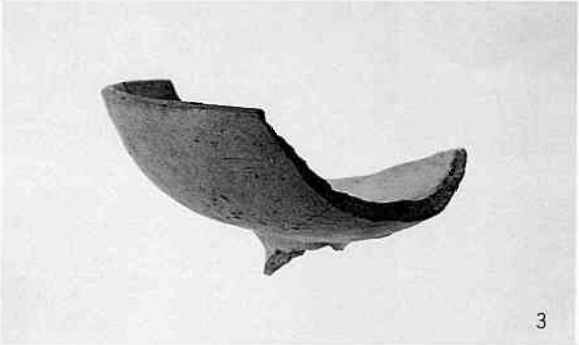
（東から）

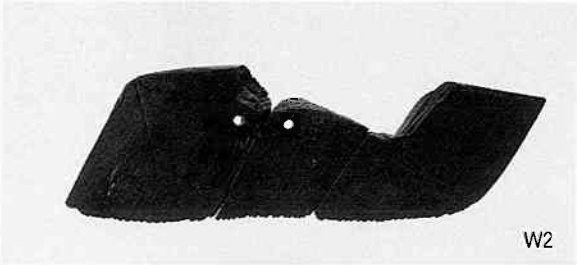
Ⅲ区遺物検出状況（２）

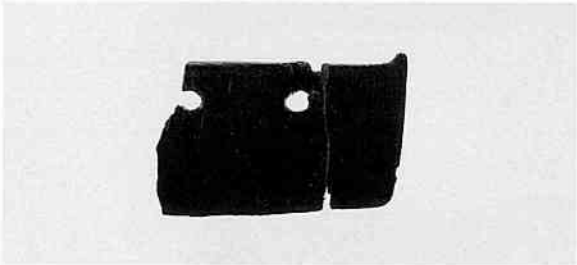


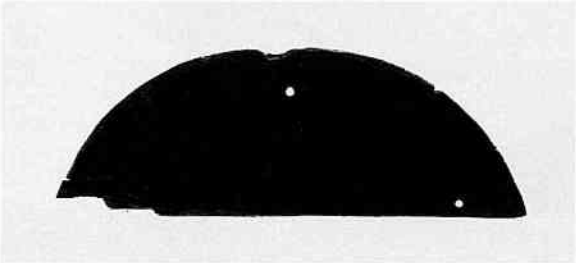
Ⅰ区出土遺物

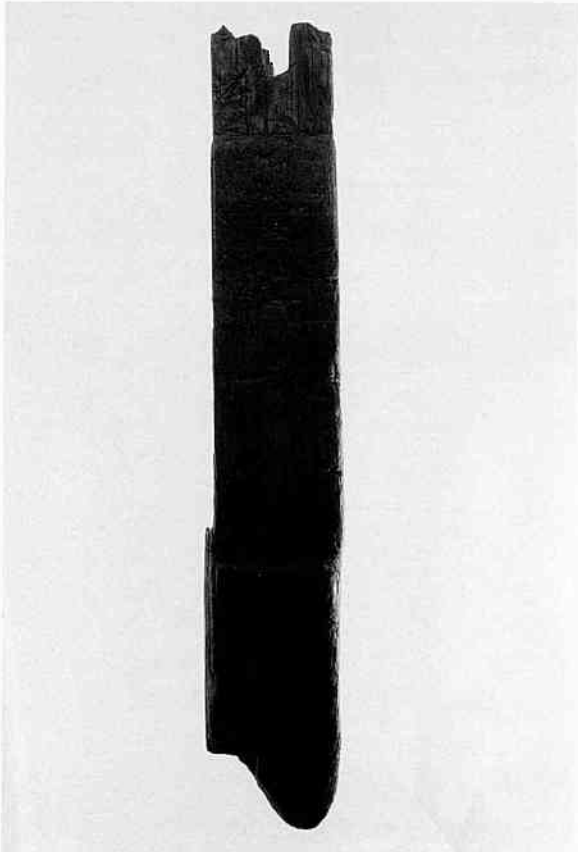




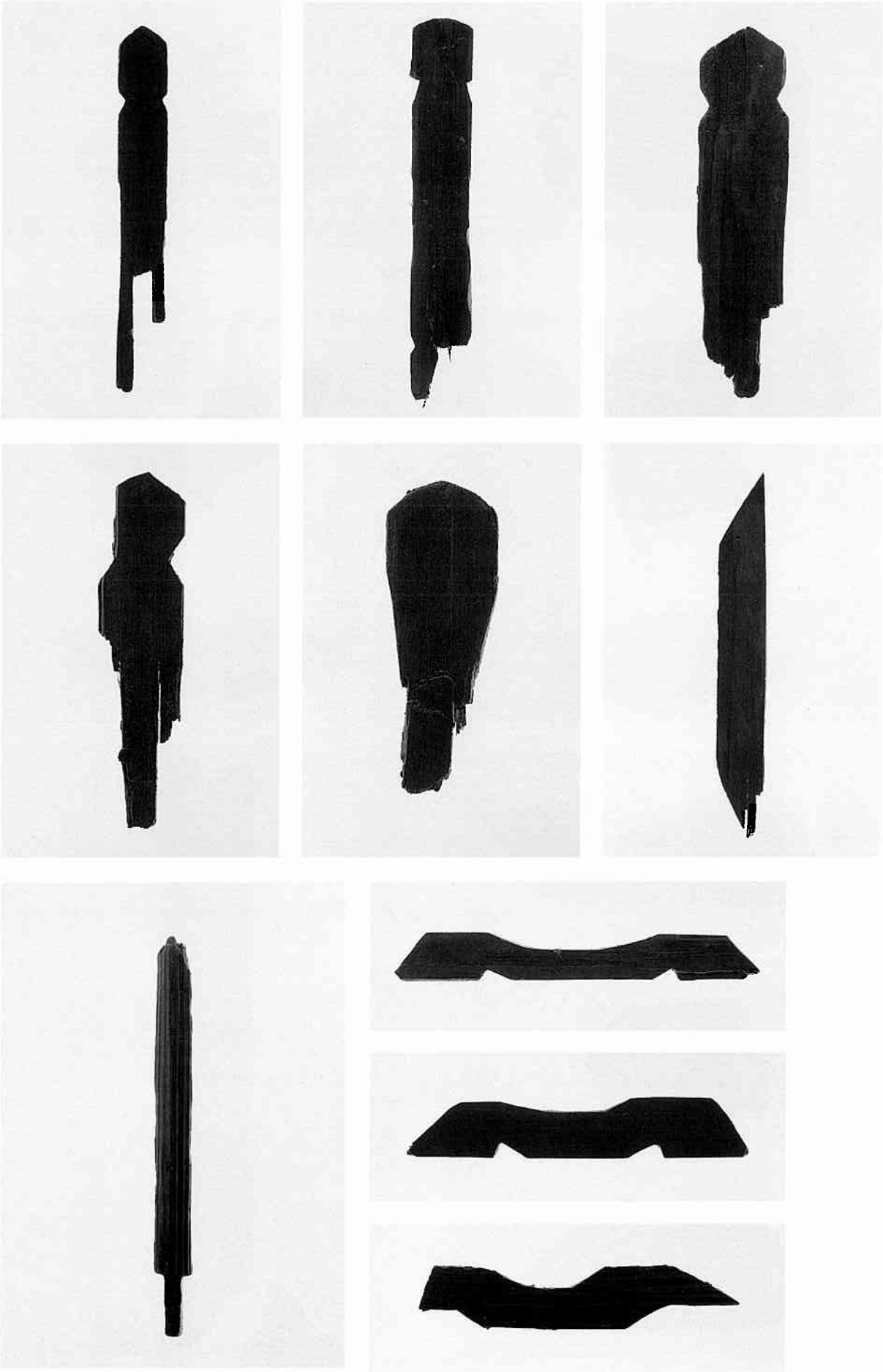






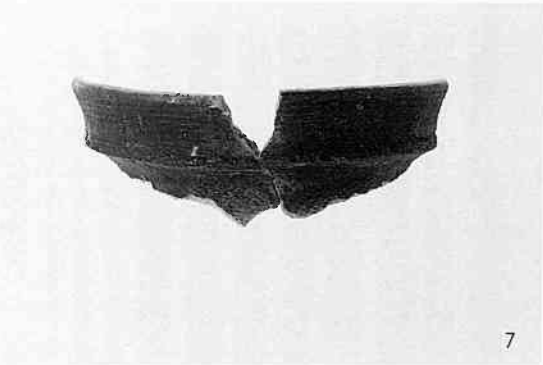


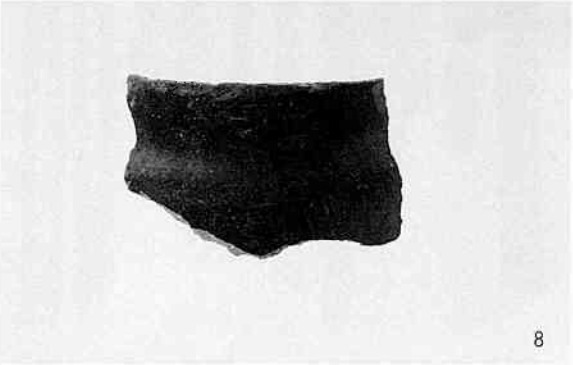
Ⅱ区出土遺物（１）



1．Ⅱ区出土遺物（2）

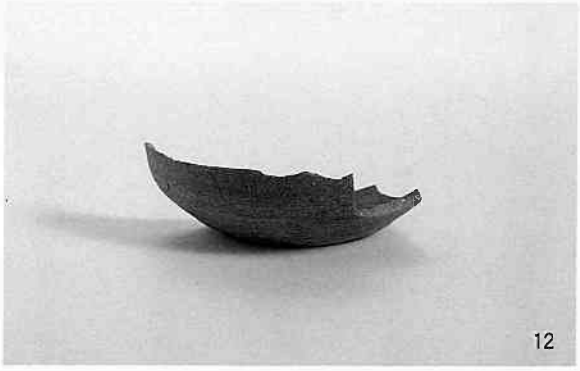
6


7

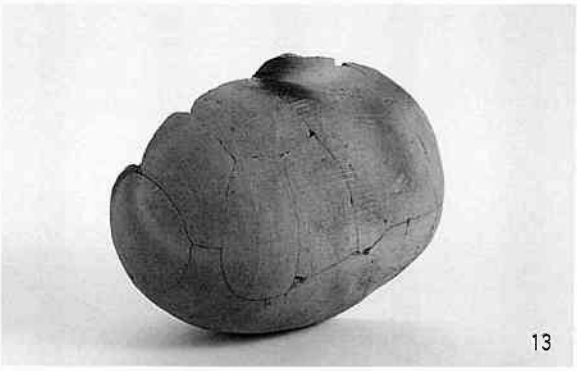

8

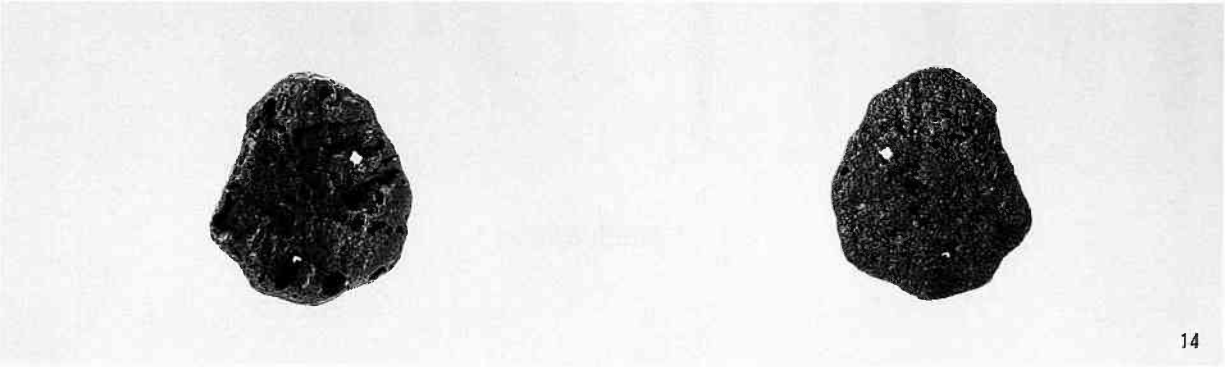
10

11

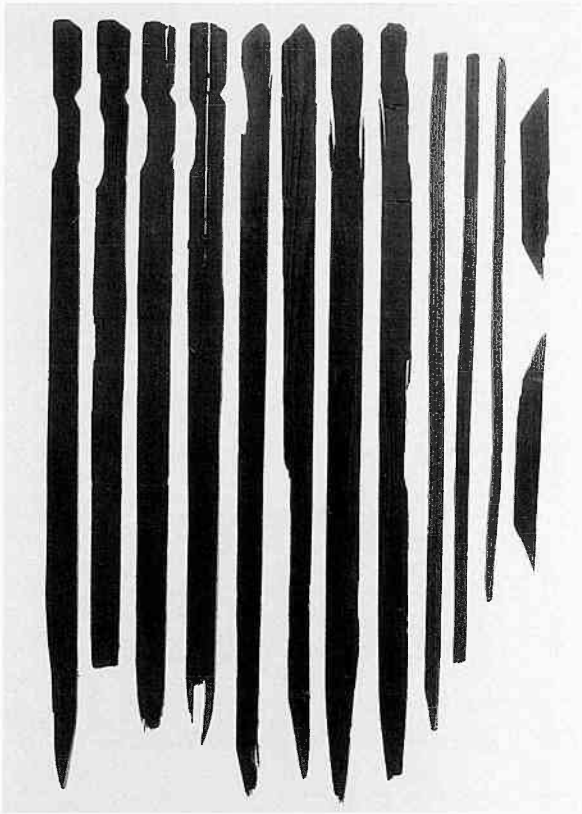

12

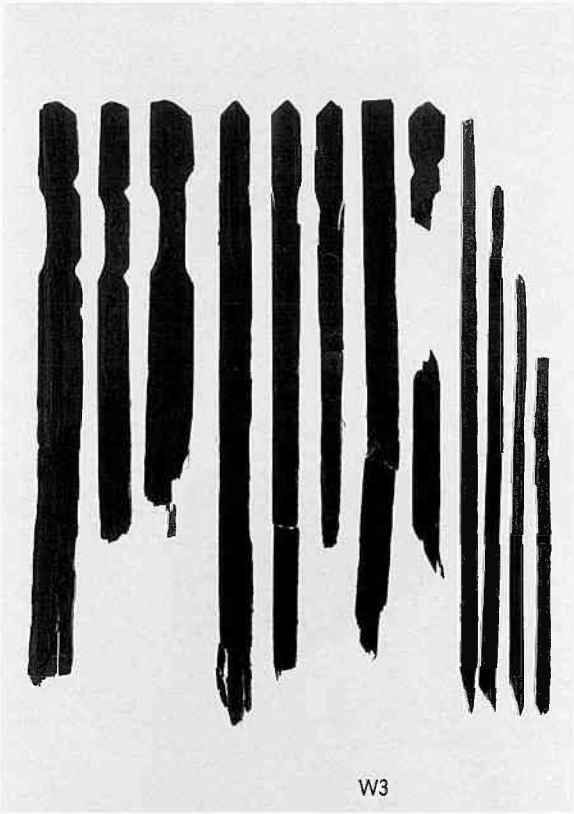
9


13


14

1．Ⅲ区出土遺物（1）





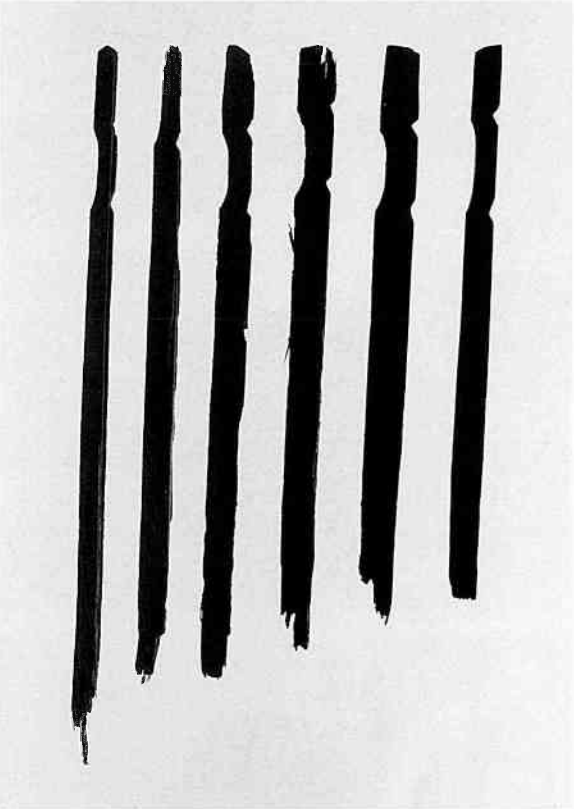
〈H〉

〈F〉

〈G〉

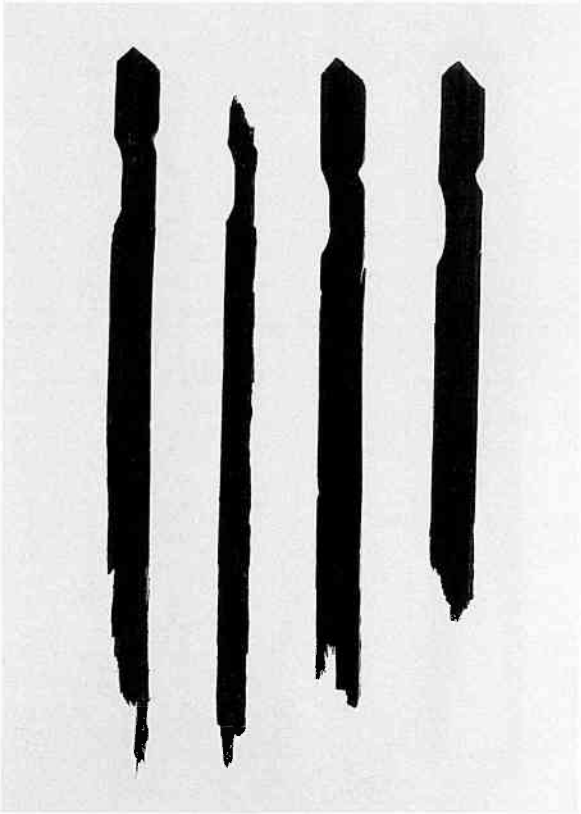
〈C〉

〈E〉

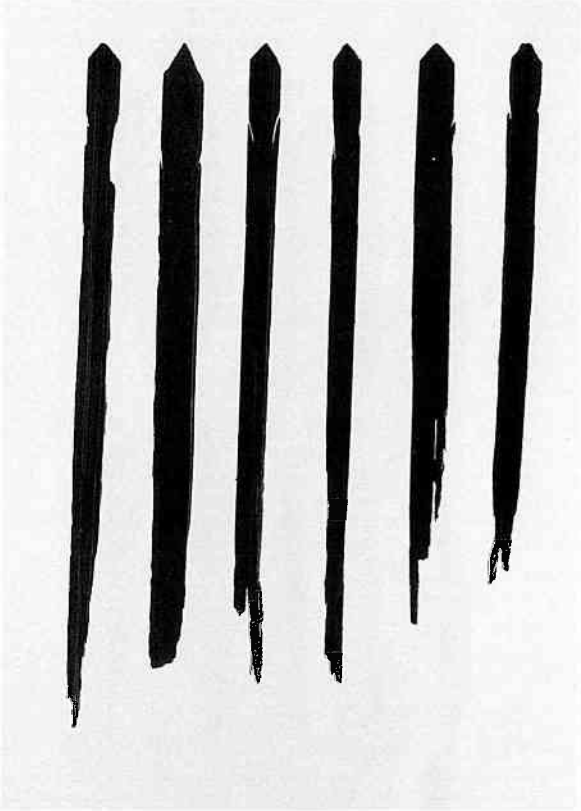


〈C〉

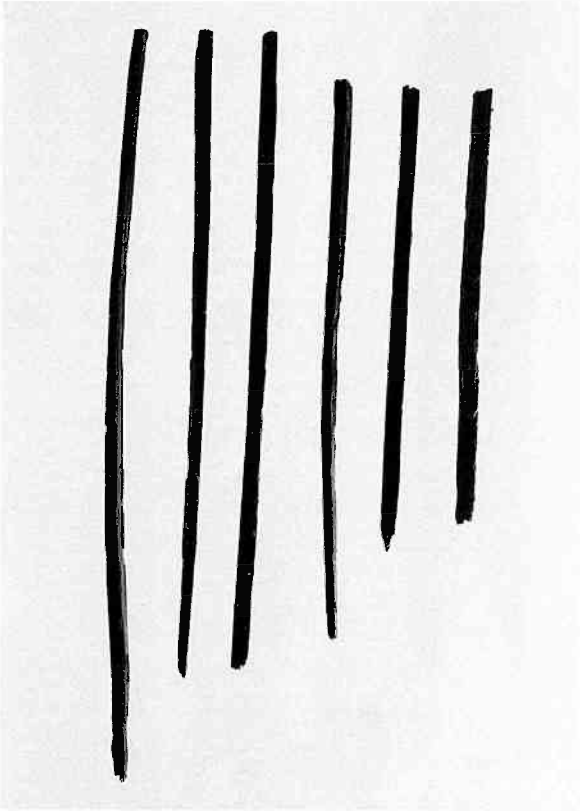
1．Ⅲ区出土遺物（2）



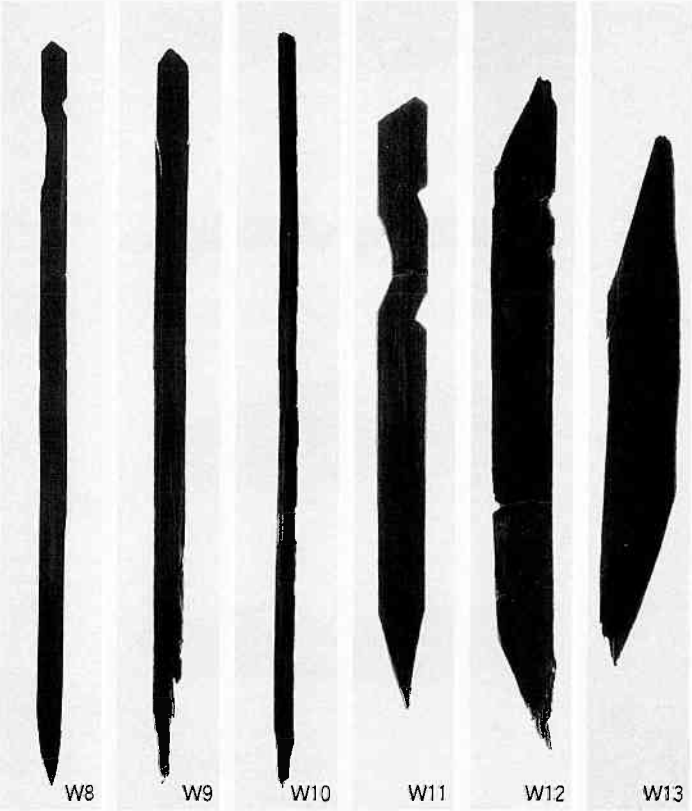
〈D〉



〈B〉

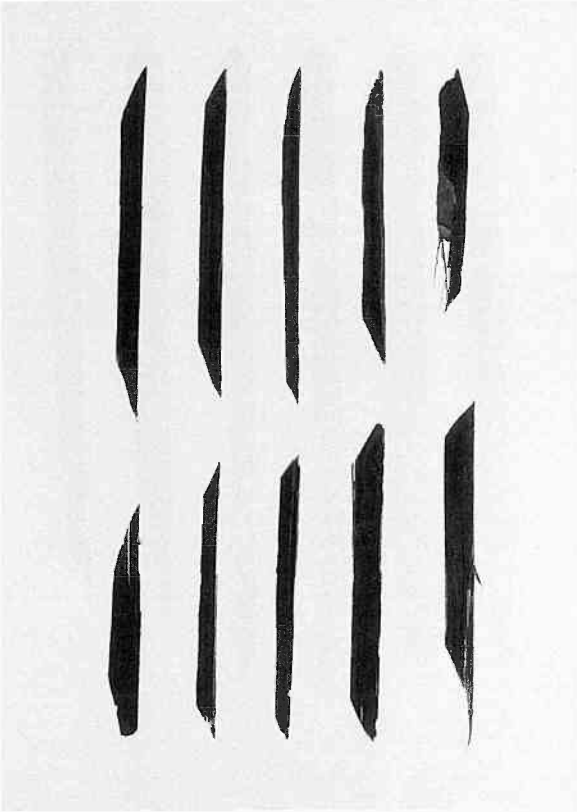


〈A〉

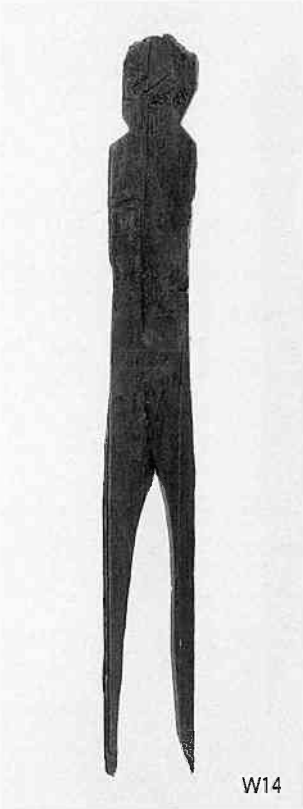


〈D〉 〈B〉 〈A〉 〈G'〉 〈I〉 〈L〉

1．Ⅲ区出土遺物（3）

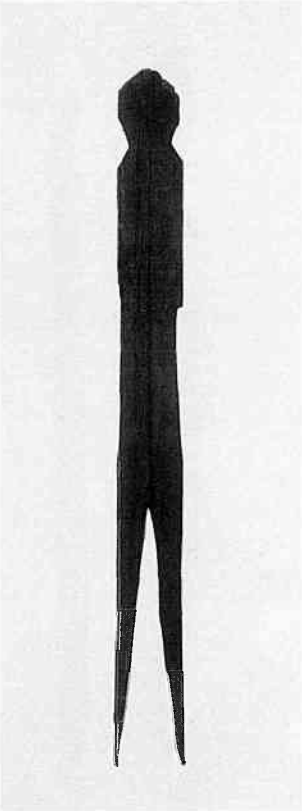


〈I〉

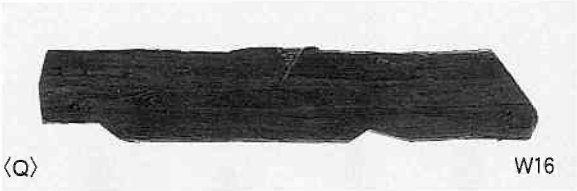


W14

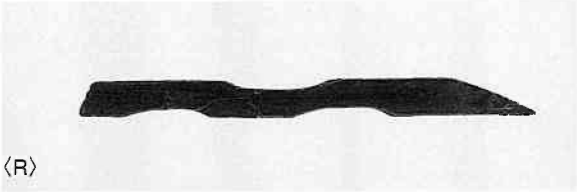
〈P〉



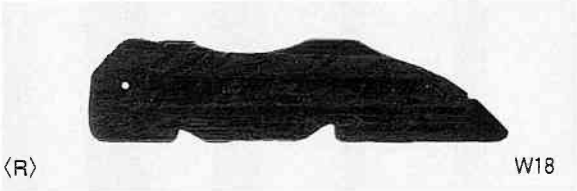
〈P〉



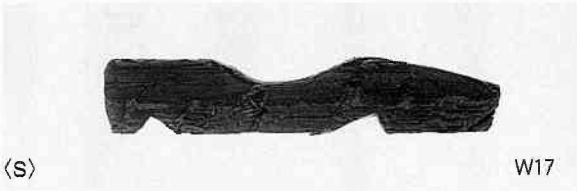
〈Q〉 W16



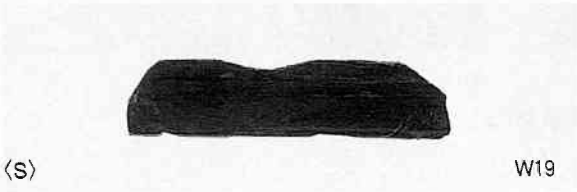
〈R〉



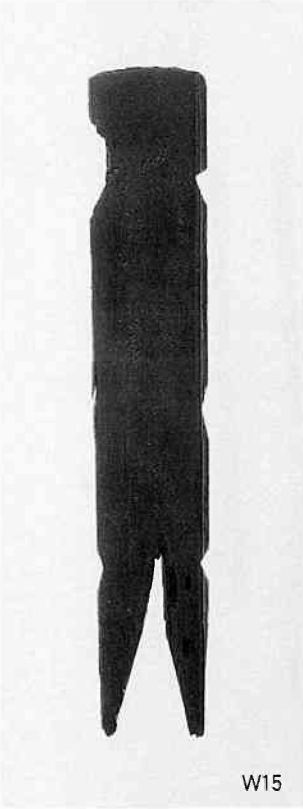
〈R〉 W18



〈S〉 W17



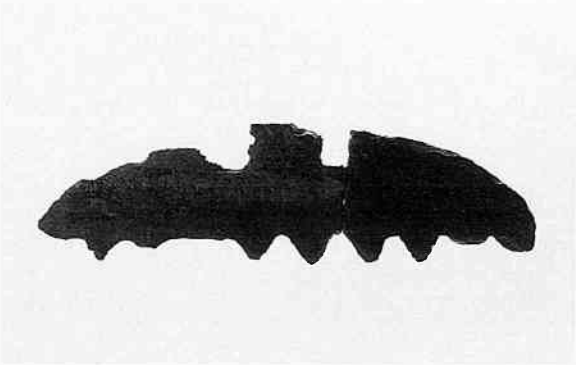
〈S〉 W19

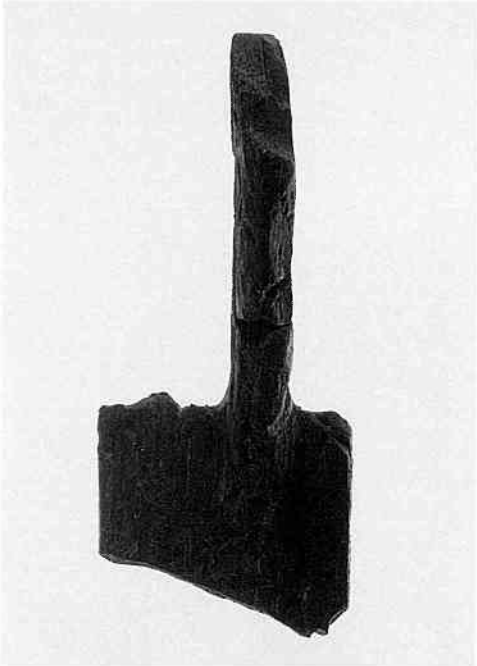


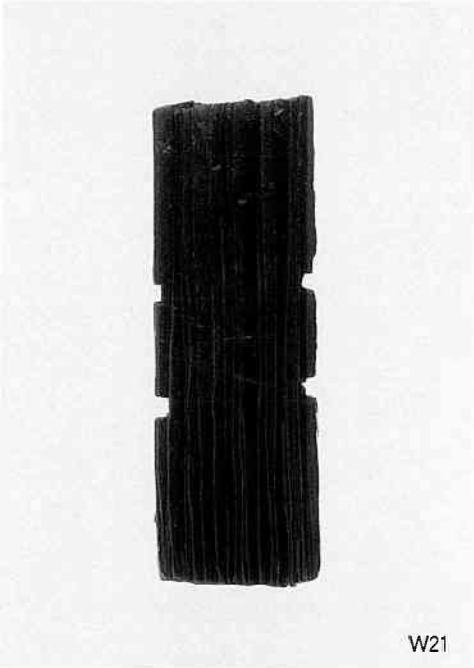
W15

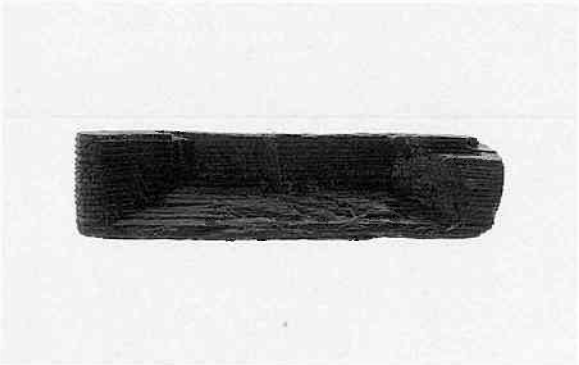
〈P〉

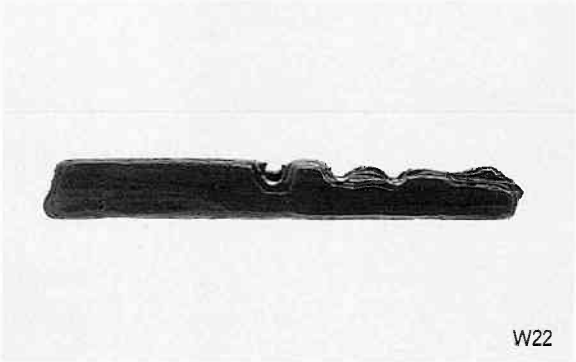
1．Ⅲ区出土遺物（4）

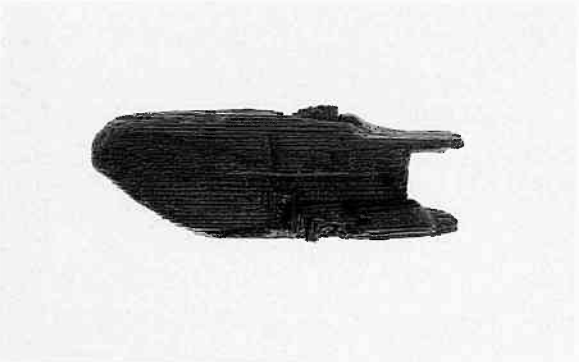


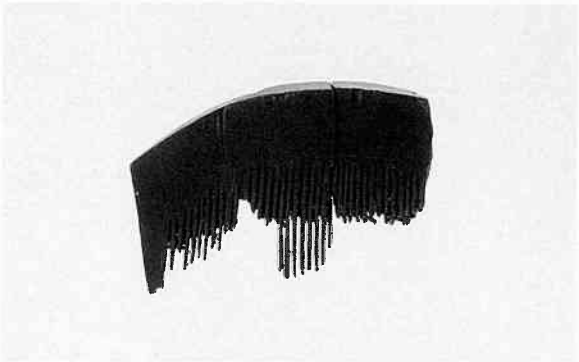












1．Ⅲ区出土遺物（5）

報告書抄録

ふりがな	おおつぼいかうまついせき
書名	大坪イカウ松遺跡
副書名	県営日置谷地区経営体育成基盤整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(第1冊)
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	山田真宏
編集機関	財団法人　鳥取市文化財団
所在地	〒680-0015　鳥取県鳥取市上町88　TEL(0857)23-2410
発行年月日	西暦2007年3月22日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おおつぼいかうまついせき 大坪イカウ松遺跡	とっとりしあおやちょうおおつぼ 鳥取市青谷町大坪	31201		35° 29′ 48″	134° 0′ 34″	2006.11.14 ～ 2007.01.22	511.0	基盤整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大坪イカウ松遺跡	集落跡	弥生時代 ～ 奈良時代	木組遺構、杭列	弥生土器、土師器、須恵器、柄振、鋤、田舟、木錘、田下駄、木庖丁、火きり臼、横櫛、下駄、曲物蓋、槽、梯子、杭、木製祭祀具(人形、馬形、斎串、剣形、刀形)	

大坪イカウ松遺跡

県営日置谷地区経営体育成基盤整備事業に
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(第１冊)

平成19年３月22日　印刷・発行
編集・発行　財団法人　鳥取市文化財団
印　刷　所　勝美印刷株式会社